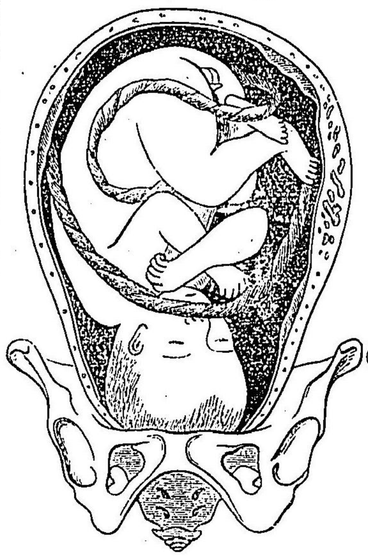
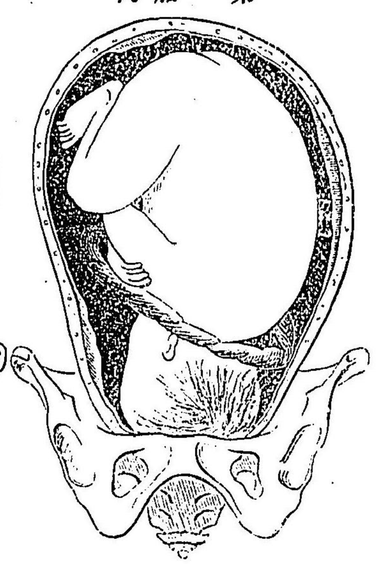
第三十一圖
第二胎向



（一分五の大然天）

第三十圖
第一胎向



（一分五の大然天）

胎勢とは胎兒身體の各部分が子宮内腔の形狀に一致せしめんが爲めに呈せる有樣を云ふものにして即ち其背を屈し頤部を胸上に接せしめ上肢は肘關節に於て屈曲し且つ之を胸面に置き左右の前膊を相交叉せしむ下肢を亦膝關節に於て屈し之を腹壁に接し左右の下腿亦相交叉して足踵を臀部に接觸せり而して臍帶は腹部の前面に於て四肢の間に存す可し之を正規の胎勢と云ふ若し手足又は頸を伸展し或は四肢に臍帶の纏絡するが如きは異常に屬す此の如き胎勢は妊娠中母體或は自己の運動により屢〻變ずる事ありと雖も決して久しく其變位に止るものにあらず

第十九章　胎兒の生理

第一項　胎兒の營養

卵は初め絨毛膜によりて子宮の脱落膜より營養物を取り次で胎盤及び臍帶を形成するに至れば胎盤部に於て其作用を營まる

第二項　胎兒の血液循環

胎兒の全身を營養したる血液

は二條の臍帶動脈より胎盤に達し其毛細管に至りて營養物を攝取し老廢物を排出して新鮮なる血液となりて一條の臍帶靜脈に湊合し以て胎兒の臍より入り全身を營養す胎兒の體內に於ける血液循環の狀況は生產後に於けるものと大に其關係を異にせり即ち心臟の左右兩房間には卵圓孔なる一孔を存し互に交通し肺動脈と大動脈との間には一管あり之をボタリー氏動脈管と云ひ兩者を連結す臍帶動脈は骨盤內より起り膀胱の兩側に沿ふて上行し遂に臍に達す

臍帶靜脈

は胎盤より起り新鮮なる血液を合み臍に入り次で肝臟の下面に於て二枝に分れ一は門脈となりて肝臟內に入り一は直ちに下大靜脈に連る之をアランチー氏

靜脈管と云ふ而して又肝臟より出でゝ下大靜脈に連合する二枝あり之を肝靜脈と稱す

胎盤を循行

して新鮮となれる血液は臍帶靜脈より兒の體內に入り肝臟の下面に至りて一部は門脈により肝臟に注ぎ他の一部はアランチー氏靜脈管を經て下大靜脈に達す而して其肝臟に循れる血液は再び肝靜脈より出でて下大靜脈內に注ぐを以て下大靜脈は下肢及び腹部內臟より還流し來れる血液と新鮮なる臍帶靜脈より來れる血液と更に一旦肝臟內を循行せる血液との三種を合して心の右房に至り上體の血液を總合せる上大靜脈と共に右房內に注ぐ茲に於て房の收縮起れば右房の血液は一部は右室に入り室の收縮に由て肺動脈中に出さる次で其大部分はボタリー氏動脈管を經て直ちに大動脈に注ぎ一部分のみ肺中を循行して肺靜脈となり心の左房に注ぐ即ち胎兒

の肺は未だ呼吸を營まざるを以て僅少の血液を流通せしむるに過ぎず此の如く右房内に於ける血液の一部は右室に入ると雖も他の一部は卵圓孔を通りて左房に入り肺靜脈より來れる血液と共に房の收縮に由て左室内に出さる次で室の收縮發作すれば此中の血液は悉く大動脈内に注ぎ先きにボタリー氏動脈管を經て來れる血液と共に大動脈の經過に沿ふて一部は上體に循り遂に上大靜脈となる他の一部は下體に循行せんが爲めに骨盤内に至り更に二分せられ一は臍帶動脈となりて臍より出で一は下半身を循りて遂に下大靜脈に總合す此の如く胎兒の血液は胎盤及び體内を環流して絶ゆることなし之を胎兒血液循環と云ふ

第三項　胎兒の無呼吸及早時呼吸

胎兒子宮内に在るの際呼吸を營むことなくして胎盤血行により酸素を攝取し炭酸を排泄するの狀態を無呼吸と云ふ

今若し臍帶の血行又は子宮の血行不良となる時は胎兒の體内には酸素缺乏し炭酸蓄積するが故に無呼吸の狀態を保つと能はずして遂に呼吸作用を發す之を早時呼吸と云ふ此場合に於て吸取する所のものは酸素にあらずして胎兒の周圍に存せる羊水なるを以て胎兒は直ちに窒息す其輕度なるものを假死と稱し娩出すれば一定の方法により蘇生せしめ得べきも高度なる時は遂に死するものなり

第二十章　妊婦の全身に現はるゝ變化

第一項　生殖器の變化

第一節　子宮

子宮の大さは通常妊娠せざる若年の婦人に於て其長さ凡そ七仙迷なれども妊娠する時は漸次増大し其末期に至れば凡そ三十五仙迷に達し其内腔の廣さは五百倍餘となる而して子宮壁は甚だしく其厚さを増し殊に子宮底部に於て著るしく子宮血管も亦頗る變大し且つ増加するに至る

子宮の位置は始め一二箇月間は骨盤内にありて益〻深く下降し其前轉前屈を強からしむるを第三箇月より漸次上昇して四箇月に至れば大骨盤内に出で爾後子宮増大するに從ひ子宮底の位置は漸々上昇し九箇月に至れば遂に心窩に達すれども十箇月に及べば再び下降す

子宮頸部は漸次弛緩し柔軟となり且つ頸管内より粘調なる粘液を多く分泌す又妊娠月數を重ぬるに從ひ子宮頸は漸く短縮し其末期に至れば只薄き緣を殘すに至る

子宮粘膜は受胎するに及び著るしく増息肥厚し脱落膜を形成して胎兒を被ひ且つ胎盤の形成に由て之を營養す

第二節　膣及び外陰部

膣及び外陰部に於ては血液の流入多きが爲めに著しく温暖となり且つ弛緩して分泌増加す又前庭膣壁子宮膣部等は變化して帶青赤色を呈し大陰唇に時として靜脈の怒張を現はすことあり

第三節　月經

妊娠中は全く月經閉止するものなれども稀には始め一二箇月の間尚月經を現すことあり

第四節　乳房

乳房は第三箇月の頃より漸次增大し柔軟となり妊娠末期に至り之を壓搾すれば稀薄水樣の乳汁を分泌す之を初乳と云ふ乳暈は其着色を增して赤色或は黑褐色を呈すべし

第二項　生殖器以外の變化

妊婦の容貌　多くの婦人は固有の光澤を失ひ淸麗花の如き顏貌も變じて皮膚の弛緩を現はし且つ屢〻黃色となり眼の周圍に靑色の輪を纏ふに至る而して妊婦全體の形狀は腹を强く前方に突出し上體を後方に反張せり

消化器系　に於ては惡心嘔吐殊に早朝、或は空腹時に來る嘔吐便秘食物嗜好の變化等を現はし又時としては唾液の分泌著しく增加するものあり

神經系　に於ては頭痛齒痛關節痛神經痛不眠等を發し屢〻倦怠の感あり其他精神過敏となり忽ちにして哀しみ又忽ちにして愉快を感ずるものなり時としては往々卒倒することあり

血行器系　に於ては心臟の機能增進して心悸亢進胸內苦悶を來し且つ血液の頭部に輻輳するが爲め眩暈衄血等を致す又子宮增大の爲め骨盤內の靜脈を壓迫し以て血液の還流を妨げ下肢に浮腫を來すことあり

泌尿器系　に於ては屢〻尿意頻數となり時としては尿閉を來すことあり

呼吸器系　妊娠する時は腹部膨大するが故に呼吸運動を防げられ呼吸に苦悶を感ず

皮膚　妊婦の皮膚には所々に着色を現すものにして眼圍、乳暈、白條線部、臍部、外生殖器等に於て褐色を呈す又腹部の膨大によりて其部の皮膚緊張し罅裂を生じて皮面に滯

赤色の線條となり現はる之を妊娠線と云ふ此線は分娩後白色に變じ永く遺殘するものなり時として乳房の膨大著しき爲め此部にも妊娠線を呈することあり

第二十一章　妊娠の徴候

婦人妊娠すれば上述の如き種々の變化を呈すると雖も亦他の疾病に於ても之に類する症狀を呈することあり故に其妊娠なるや否やを判斷するは決して容易なるものにあらず今妊娠の徴候を三種に區別して說明すべし

第一　不確證

妊婦の生殖器以外に發する變化にして即ち神經系消化器系、泌尿器系循環器系呼吸器系及び皮膚等の變常之なり

第二　疑證

妊婦の生殖器に發する變化にして即ち

(一)月經の閉止殊に平素整順なるものゝ停滯

(二)子宮の增大及び其軟化

(三)膣內の溫暖分泌の增加及び膣壁の着色

(四)乳房の增大着色

此等の徴候は略ゝ其妊娠たることを定め得べきを以て疑證の名ありと雖未だ確實なるものと云ふを得ざるなり

第三　確證

胎兒より發する徴候にして即ち

(一)胎兒心音の聽取

(二)臍帶雜音の聽取

(三)胎動音の聽取及妊婦の自覺

(四)胎兒各體部を明かに觸知し得ること

此等の徴候は妊娠の五箇月以後に非ざれば發せざるを以て其以前に於ては確實なる妊娠の診斷を下すこと能はざるものなり

第二十二章　妊娠各月の徴候

妊娠時期を診斷せんには妊婦自己の證言のみを以てするは往々正しからざる事あり故に之を確むるが爲めに

檢査を施すを緊要なりとす而して初妊婦に於て其各月を鑑定すべき徴候は左の如し

第一箇月末に至れば

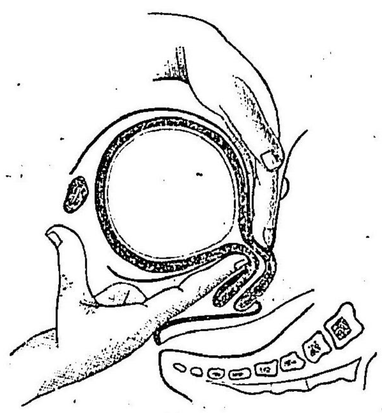
腟内の分泌頗る増加し且つ一般に温暖となり熟練なる檢査による時は子宮體の柔軟となり稍〻腫大せるを觸るべし妊婦の自覺症としては下腹内に温氣を感じ胃部苦悶惡心嘔吐異嗜等なり

ヘーガル氏の妊娠徴候

妊娠時に於て、其月經閉止の後第一箇月にして一手を腟内より挿入し一手を腹壁に貼て〻雙合診を行ふときは子宮頸の子宮體に移る部は著るしく柔軟となりて殆んど消ゑ失せたるが如きを覺ゆべし之れ妊娠を鑑別する徴候にして名けてヘーガル氏の妊娠徴候と云ふ

此の如き變化を呈する所以は妊娠時に子宮體は頸部に

第三十二圖



ヘーガル氏妊娠徴候

比ぶれば甚だしく柔軟となりて之れに觸るゝに恰かも軟き餅の如く覺ゆるに過ぎず爲めに内部にある卵子はかく軟かなる子宮壁を隔てゝ稍〻硬く觸知せらる故に其部と子宮頸部との間は恰かも間の斷れて消ゑ失せたるが如く覺ゆるなり

第二箇月末に至れば

子宮は殆んど鵞卵大に達し益〻柔軟となる然れども其頸部は體部に比し稍〻硬し故に之れを檢査する時は恰も子宮は頸體の中間に於て兩斷せられたるが如し之をヘーガル氏妊娠徴候と稱す但し此徴候は

他の子宮疾患に在りては決して現はるゝものにあらず

第三箇月末に至れば子宮は手拳大となり殆んど小骨盤内を充たし柔軟餅の如くなるを觸るべく膣壁及び他部には着色を始め下腹部は少しく凸出するを認む妊婦の自覺症は益ゝ増加し尿意頻數便秘神經痛等を來し時として下肢の浮腫を現すことあり是れ子宮増大の爲め膀胱直腸其他骨盤内に存する血管或は神經等を壓迫するに由る而して此月より乳房は稍ゝ緊滿を來し着色するに至る

第四箇月末に至れば子宮凡そ兒頭大となり全く骨盤内を充たし其底部は骨盤入口上に出づ故に外部より明かに恥骨縫際上に於て球形を成せるを觸知し得べし又外診上能く子宮血管の雑音を聽取し得べく時としては胎動音を聽く事あり

第五箇月末に於ては子宮底は臍と恥骨縫際との中間に位し胎兒の心音は此月より聽取し得べく妊婦は胎動を感ずるに至る此時期に達すれば子宮は全く骨盤内を出て周圍を壓迫することなきが故に壓迫に因れる不快の妊娠症狀即ち浮腫便秘神經痛等は頓に消散し惡心嘔吐も亦全く治するものなり

第六箇月末に於ては子宮底は凡そ臍の高さに達し胎兒の各體部を明かに觸知し得るに至る

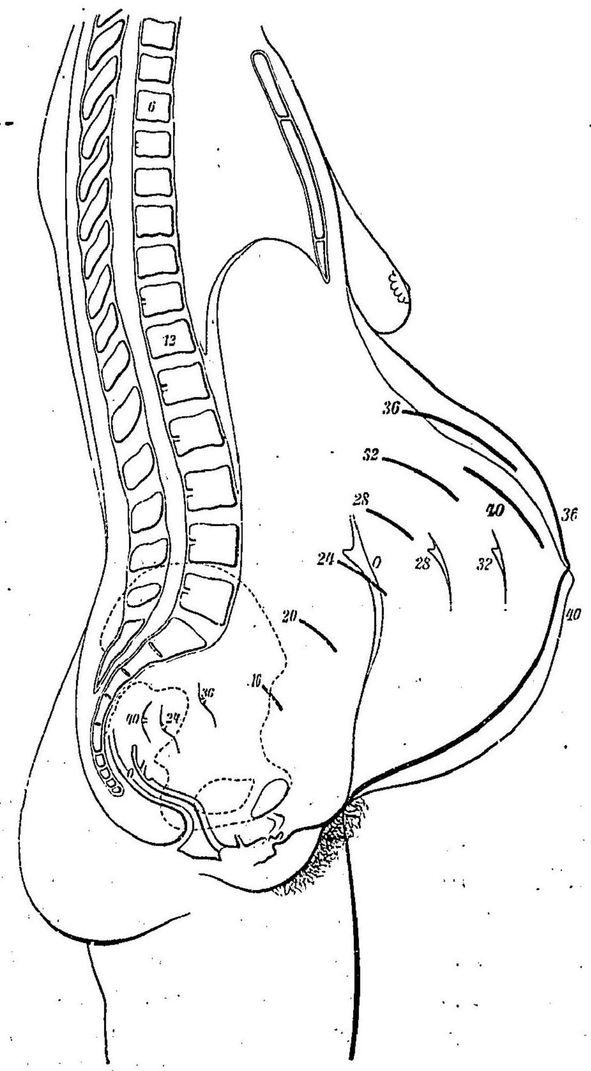
第七箇月末に至れば子宮底は臍上一指横經の部に達し下腹部は膨大して妊娠線を現はす

第八箇月末に於ては子宮底は臍と胸骨劍狀突起との中間に達し臍窩は全く平坦となる

第九箇月末に至れば子宮は心窩部に昇り其底部は劍狀突起下に達し側部は全く肋骨弓に接し全腹到る所緊滿す又子宮外口は僅かに哆開すと雖内口は堅く閉鎖するも

のなり妊婦は此時期より子宮の收縮を自覺し胎兒の運動

第三十三圖　妊娠各期の子宮底子宮膣部及び腹壁(天然大の五分一)



數字は妊娠各週を示す

は益〻其強さを加へ爲めに安眠し得ざる事あり且つ子宮の著しき膨大の爲め肺臓壓迫せられ呼吸困難を來し妊婦の苦悶は今や其極度に達すべし

第十箇月末

に於ては子宮再び下降して其底部は八箇月末同高の位置に至り妊婦は呼吸輕易となるを覺ゆ而して臍窩は突出するに至り兒頭は全く骨盤内に固定せられて移動せず且つ子宮膣部は消失し薄き緣となりて子宮口を圍む陰部は著しく弛緩して分泌を增し膀胱直腸は壓迫せらるゝにより兩便共に頻數の感を生ず

以上述べたる所により子宮底の位置を檢して殆んど確實に妊娠の月數を知るを得べし但し八箇月と十箇月とは子宮底同一の高さにあるを以て之を區別せざるべからず

第十箇月末

其鑑別點左の如し

第八箇月末

一　胃部の腹壁頗る緊滿す　弛緩す

二　臍窩は平坦となる　突出す

三　兒頭骨盤入口に移動す　既に固定す

四　子宮膣部は尚一指節の長さを有す　楔狀をなし又は全く消失して觸れる能はず

經妊婦其他に於ける種々の變狀

既に一旦妊娠を經過せるものなるを以て其變化は初妊婦の如く正しからずして種々の差異あり

第一腹壁　は既に弛緩せるが故に子宮底は正しく上昇することなく主として前方に挺出すべく其甚だしきものは腹壁囊狀を成して下垂するに至る之を懸垂腹と云ふ

第二兒頭　は分娩に至るまで全く骨盤內に固定せずして移動し易きものとす

第三子宮膣部　は妊娠末期に至ると雖全く消失することなし

第四子宮口　妊娠第九箇月に至れば內外口共に哆開して頸管內に一指を挿入し得べし

第五胎動　經妊婦の胎動を感ずるは初妊婦よりも一二週間早きものとす

其他初產婦に在りても羊水多量なるか胎兒大なるか雙胎なる時は子宮底は過度に上昇し正規に從ふものにあらず又骨盤の狹窄あるときは兒頭骨盤內に進入し能はざるが故に第十箇月に至るも子宮底下降せず時として懸垂腹を生ずることあり

第二十三章　分娩期日算定法

妊娠の持續　は受胎後平均二百八十日なるが故に分娩期日は即ち終末月經の第一日より算して二百八十日に相

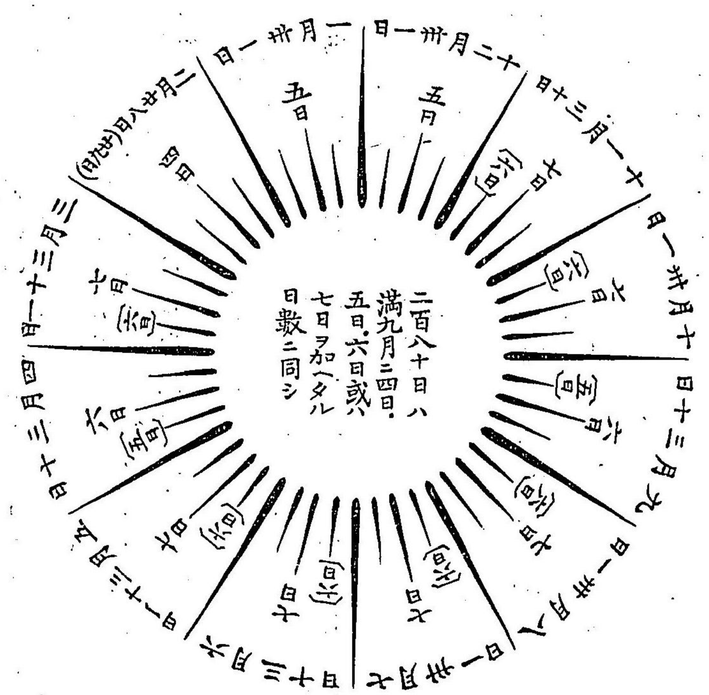
當する日なりと雖毎常之を計算するは頗る煩はしきを以て單簡なる方法により之を算出するなり

第一法　終末月經の第一日より三箇月を減じ之に七日を加ふるの法にして例へば今一月の十日に最終月經を見たりとすれば之より三箇月を減じ十月十日を得更に七日を加へれは十月十七日となる即ち此日に於て分娩するものと概知すべし

第二法　前法よりも更に精密なる算定をなさんとすれば第三十四圖に示すが如き分娩日測算曆により之を算出すべし其法は即ち圖中矢の方向に向て終末月經の月より三箇月を算へ各月の下に記せる數字を最終月經の第一日に加べきものとす括弧内に記せるものは閏年に用ゆるものなり今十二月一日を終末月經の第一日とすれば右方に三箇月を算へ九月を得其一日に六日を加へ九月七日となる

第三十四圖

妊娠曆



（閏年にはありては九月六日となり）即ち此日は終末月經の第一日より二百八十日に相當するものとして分娩すべき期日なり

第三法　胎動初發の時期より算するものにして通常胎動は二十週より發起す故に妊婦の始めて之を自覺せし日に二十週を加ふる時は分娩期日を得べし然れども胎動を感ずるは頗る不確實なるを以て此法は實際に應用し難し

第二十四章　妊婦の檢査法

妊婦を檢査するには必らず先づ次の順序に由り問診すべし

一　姓名年齢及び職業

二　既往疾病の有無

三　月經初發の年齢及び其順不順並に日數

四　既往妊娠の有無及び其經過殊に產科手術を要したるや否や

五　終末月經の期日

六　胎動の有無及び其初發の時期

七　妊娠終末期に於ては子宮の下降せる感ありや否並に其下降を初めたるの期日

此の如く問診するの後ち產科的檢査法を施すべきものにして之に三種あり外檢査法、內檢査法、雙合檢査法之なり

第一項　外檢査法

外檢査法とは身體外部を檢するものにして之に視診觸診聽診の三種あり

第一節　視診

視診とは妊婦一般の狀況を視察するものにして之を區別すれば次の如し

一般の檢査　既に問診を終らば次で妊婦の體格營養步

行の狀態、脊椎の彎曲等を檢すべし

乳房の檢査　乳房の形狀乳頭の大小乳腺の狀態、乳暈の着色疾病の有無等を視察す

腹部の檢査　腹部の大小形狀臍窩の狀態妊娠線の有無並に其新舊等を視診するものにして通常腹部の觸診を行ふの際施すべきものなり

下肢の檢査　浮腫及び靜脈瘤の有無等なり

第二節　觸診

觸診とは手指を以て觸察するものにして產科的診斷上最も必要なる診法なり之を別ちて腹部及び骨盤の檢査とす

腹部の檢査　妊婦を仰臥せしめ兩脚を屈し上半身を稍高くし衣服腹帶等は全く之を緩解せしむ但し可成多くを

曝露せしめざらんことを務むべし而して先づ視診により該條下に記せる諸種の狀態を檢し次に豫め温めたる兩手を用て檢すべく此際檢者は妊婦の一側に座し其顏面を對向すべし而して此法に四式あり（卷首の彩色圖譜を見よ）

第一式に在りては檢者其兩手指を伸べ指端を近接せしめ八字形に腹壁の中央部に置き次ぎに兩手を此位置に保ちつゝ同時に輕く上方に移して子宮底に貼し其部をかへるが如くにして檢す

此の如くする時は（一）子宮底の部位を明かにし（二）胎兒の大小及び其位置の縱橫を判じ（三）妊娠の時期を診定し得可く（四）子宮底部に存するものゝ頭部なるや臀部なるやを認識し得べし

第二式に至れば子宮底部の兩手を左右に開き手指は常に併列せしめて之を側腹部に移し以て子宮の側壁に貼

す此際多くは一手に小部分即ち四肢を觸れ他手は兒背に應すべし然れども若し胎兒横位を取る時は一手に頭部を他手に臀部を觸知するなり此法によりては（一）胎兒の胎向

（二）心音聽取の部位等を診定し得べし

第三式　左若くは右の一手を以て其拇指を骨縫際上に於て拇指及び中指の間に兒の先進部を把握すべし此法に於ては（一）先進兒部の頭部なるや或は臀部なるや（二）先進兒部の骨盤内に固定するや否や等を識別し得可し

第四式　産婦を側臥に就かしめ檢者は其背側に座し兩手尖を兩鼠蹊部の上に加へ徐々に骨盤の側壁より深く其兩手を兩鼠蹊部の中に進ましむ此法は先進兒部の深く骨盤内に進入せる際に施すべきものにして通常は第一式乃至第三式を以て足れりとす

各體部觸診上の狀況

兒頭　は圓形にして頗る固く之を一手或は兩手間に把握し振動せしむる時は兩側の手指に衝突するを感知すべし之を浮遊運動と云ふ此運動は頭部の特徴にして臀部に於ても存することなきにあらずと雖頭部の如く著しからず

臀部　なるときは其形狀不正にして頗る柔軟なり胎兒の頭部及び臀部を稱して大部分と名づく

背部　は手掌を貼して之を試むるに平圓にして長き面を觸知すべし

四肢　は即ち小部分と稱し大小不正なる突起狀をなして觸知し得らる

骨盤の檢査　腹部の檢査を終らば骨盤外部の狀態を檢

すべし即ち先づ一手を骨盤の後側に他手を前側に貼し薦骨及び耻骨縫際の突出せる度並に前後經の廣狹を概診し次ぎに一手の拇指と小指とを伸展し兩腸骨前上棘に達し得ることなきやを檢するを要す若し容易く達する時は其骨盤狹きを知るべし然れども此等の診法は甚だ不完全なるを以て精密に檢査せんと欲せば骨盤計を以て第一編第三章大骨盤の條下に記せる所の諸經線を計測すべし

第三節　聽診

腹部の聽診

を行ふには妊婦を仰臥せしめ觸診により得たる部位に聽診器を貼すべし若し此器を有せざる時は薄き布片を腹上に置き直ちに檢者の耳を貼して聽診するを要す而して之により聽取し得可き音に六種あり即ち

(一)胎兒の心音
(二)胎動音
(三)臍帶雜音
(四)子宮血管の雜音
(五)腸内瓦斯の雜音
(六)腹部大血管の雜音

以上の前三者は胎兒より發し後三者は母體より來るものなり

胎兒の心臓音

は兒背の子宮壁に接したる部に於て最も明かに聽取し得べし雖も若し胎勢の變化即ち頭部を胸壁より離し却て後頭を背部に接せる時は胎兒の胸面は背面よりも子宮壁に近きを以て心音は小部分の存する方向に於て聽取するを得るものなり而して其音は他の諸音に比し最も明瞭にして規則正しく恰もトッ〳〵と云ふが如く響くべし其數は平均百四十至にして通常之より以下なる時は男兒とし以上なる時は女兒となす若し母體の體温昇騰するか又は胎兒常さに窒息せんとする時は其數を增加するものなり

胎動音

は胎兒の運動する際に發し恰も指を以て輕く

物を打つに類せる甚だ低くして短き音にしてこと〳〵と云ふが如し稀には妊娠第四箇月の終りに於て心音に先ちて之を聽取し得ることあり

臍帶の雜音は心音に一致し恰も輕く吹くが如き雜音にして臍帶に壓迫若くは結節を生ずる場合に於て血液其の狹められたる血管内を流通する時に發する音なれば稀れに聽くことあるのみ殊に臍帶の頸部に纏絡せる際に於て能く聽取し得可し

子宮血管の雜音は妊娠により增大せる血管内に血液の流通する音にして子宮の兩側殊に下方に於て聽取し得可く其數は母體の脈搏に一致し恰も風の吹き鳴るが如き音なり

腸内瓦斯の雜音は母體の腸内にて瓦斯の運動する爲に生じごろ〳〵と云が如く恰も下痢時と同樣の腹鳴なり

腹部大血管の雜音は母體腹部大動脈中に血液を流通する音にして脈搏と一致し輕く敲くが如き低き音なり

第二項　内檢査法

内檢査法は之を内診と稱し手指を膣内に挿入して骨盤及び胎兒の狀況を檢査するを云ふ而して之を行ふには嚴重なる殺菌法乃ち殺菌的清潔法を施すに非ざれば決して手を下すべからず

第一節　殺菌法

殺菌法とは細菌を撲滅して之を無害たらしむるの法にして若し之を忽にする時は遂に產婦褥婦若くは初生兒の生命をも損するに至るものなれば助產婦たるものは寸時も忘却すべからざるなり

細菌とは極めて微にして顯微鏡の力によらざれば到

底見ることを得ざる所の生活物にして空氣塵埃或は吾人身體の表面其他凡て物體の表面に多く存在するものにして若し此者が一個たりとも身體內に入る時は忽ち繁殖して數萬の多きに達し以て劇しき疾病を發す此の如く細菌身體內に襲來し障害を呈するを傳染と云ふ吾人身體の表面には上述の如く多數の細菌を附着すれども其害を致さざるの理由は即ち身體の表面には表皮ありて能く之を被ひて保護し其進入を防ぐに由る今此部に損傷を生じ假令へ目視し能はざる小創なりと雖も細菌は容易く進入し以て傳染の危險を發すべし殊に產婦褥婦等は多くの創傷を生ず殖器に有するのみならず此部の組織は血液に富み著しく柔軟なるを以て能く細菌の浸入に適し且つ惡露なるものは大に細菌を培養するに良好なるものなれば其危險の甚だしきや言を俟たざるなり此故に助產婦は必らず自己の手及び檢査を受くる婦人の陰部に嚴重なる殺菌法を行ひ細菌を撲滅せしむるを必要とす而して殺菌法の目的を達せんには左の消毒藥を用ゆべし

石炭酸は從來尤多く用ゆる殺菌藥にして無色の針狀結晶をなし一種の臭氣と燒灼味を供へ貯藏して久しきを經たるものは溶解流動して赤色を帶ぶるに至る其濃厚溶液は强き腐蝕性を有するを以て之を用ゆるには豫め稀釋せざるべからず即ち通常二乃至三布仙となして用ゆれども其溶解法の困難なると强き刺戟性を有するに依り獨逸帝國にありては近來助產婦にリゾールを代用せしめたり

石炭酸水を調製するには先づ結晶石炭酸九分を取り之に水一分を混じ溶解せしめて蓄へ置き今一布仙即ち百倍のものを製せんとせば一瓶中に溶解石炭酸一瓦と水九十九瓦とを入れ能く之を振盪して全く水と混和するに至らしむべし左に混合の液量を掲げん（次表%は布仙の事なり）

稀釋布仙

溶解石炭酸	水

一％即ち百倍の石炭酸水　一、〇　九九、〇
二％即ち五十倍の石炭酸水　二、〇　九八、〇
三％即ち約三十三倍の石炭酸水　三、〇　九七、〇
四％即ち二十五倍の石炭酸水　四、〇　九六、〇
五％即ち二十倍の石炭酸水　五、〇　九五、〇

リゾールは石炭酸に比すれば尤も汎く應用せらるゝ殺菌藥にして黄褐色の強き臭氣を有する液體なり通常百倍となして用ゆ其百五十倍乃至二百倍のものは白色乳樣の混濁を生ずれども百倍に於ては無色となり五十倍乃至七十倍の溶液は日本酒の如き色を呈するを以て着色の度により溶液の強弱を推知し得可し但し水質の不良なる者に殆んど乳色に變ずることあり

リゾールは石炭酸に比し數個の優れる點あり即(一)水に溶解し易きこと(二)手指を滑澤ならしむること(三)手指を滑澤ならしむるが故に內診の際油を塗るを要せざること(四)石炭酸よりも稀薄溶液を用ゆるを以て皮膚粘膜等を刺戟すること少なき等なり然れども其價石炭酸よりも少しく高きの不利あり

昇汞は石炭酸及びリゾール等に比すれば強き殺菌力を有するものにして白色の粉末なり此く殺菌力強きが爲めに其毒性も亦劇しく僅少量を內服するも直ちに人を殺すに至る其溶液は水樣にして他の藥物と混同し易きが故にフクシンと稱する赤色の粉を以て着色し用ゆ通常千倍となし賞用すれども五千倍若しくは一萬倍の溶液と雖も能く殺菌力を有するものなり此の如く其殺菌の効力に至ては他藥に勝ると雖も金屬を浸蝕するの性質あるを以て金屬製器械の消毒に適せずの不便あり

第二節　手指の殺菌法

手指の殺菌法を行ふには器械的清潔法を行ひ次で殺菌藥を以て洗滌すべし

先づ肘關節に至るまで上衣を脱却し指尖の爪を剪り爪鑢子を用ひて其端を圓滑にし且丁寧に爪の裏面に附着せる汚垢を去り微温湯、石鹸及び刷子を以て五分間手及び前膊を綿密に摩擦し更に温湯を以て石鹸を洗ひ去り後ち千倍の昇汞水を以て洗ふべし但し實地上尤も便利なるは始めより一布仙のリゾール溶液と刷子を以て摩擦するもあり

又始め五分間温湯石鹸刷子等を以て摩擦し洗滌せるの後ち手指を酒精中に投じ再び刷子を以て三分間摩擦し次で二三分間千倍の昇汞水中に投ずるの法あり此法は殺菌完全なりと雖も複雜なるを以て實地上に於ては前法を用ゆるを便なりとす

此の如くにして消毒したる手指は決して手拭其他の布片を以て拭ふべからず若し又殺菌せざる物品に觸るゝ時は再び殺菌法を行ふべし

第三節　内檢査の方式

内檢査を行はんとせば先づ被檢者に仰臥位を與へ膝を屈し且つ之を開かしめ腹部より以下には清潔なる廣き布片を被ひ臀下には小なる枕子を送入し且つ廣き受水盤を挿むべし而して被檢者の一側にはイルリガートルに殺菌液即ち一布仙のリゾール水若しくは二布仙の石炭酸水を盛り凡そ床上より三尺の高さに懸け助産婦は被檢者の兩股間に座し一側の膝部を以て受水盤の前端を支へ殺菌

したる手指を以て石鹼温湯刷子を用ひ陰阜大腿の内面肛門の周圍等を丁寧に洗滌し次でイルリガートル中の殺菌液を以て能く洗滌すべし而して其嘴管を膣内に挿入し此部を洗滌して不潔物を除去し然る後ち助産婦は尚一回手指の殺菌法を行ひ以て内診すべきものとす又外陰部洗滌の際兼て此部の視診を施すを良とす即ち糜爛或は浮腫等を存せざるや又は分泌物多量なるや否や其他處女膜の狀態恥骨弓の廣狹、座骨結節の距離等を檢知すべし

内診　するには一手の拇指及び示指を伸べ他の三指を屈し之を陰部に進め他手の拇指及び示指を以て小陰唇を開き而して檢査に用ふべき手指は其指腹を後方に向け伸展せる示指を後連合部に貼し膣の後壁に沿ふて骨盤誘導線の方向に從ひ徐々に深部に送り次で指腹を前方に向はしむ其際骨盤の側壁に於て一の突起を觸る之即ち坐骨棘

にして骨盤廣部及び狹部の境界部なりとす而して前方に來らしめたる示指は深く前膣穹窿部に至り膣壁を隔てゝ其上方に在る胎兒の先進部を探るべし次で子宮膣部を周りて其狀態を檢し且つ指端を子宮口部に送り外口の狀況を知り終りに示指を後方に進め容易く薦骨岬に達し得るや否やを檢査すべし若し達するを得ば其骨盤は狹く分娩に害あるものと知るべし

第四節　内檢査によりて檢知し得可き事項

今内診によりて檢知し得可き事項を擧ぐれば

第一　膣の後壁　に於て挿入したる示指と外方に存する拇指との間に會陰を挾み其の硬軟により會陰の延張性を檢知し且尾骶骨部に達し薦尾關節の運動性を試むべし

第二　膣の前壁　に於ては先づ尿道下壁を壓し其疼痛の有無及び壓迫によりて尿道口部に膿汁を排泄すること

なきや否や等を檢し次で前膣穹窿部に至りて其上方に來れる胎兒の先進部の形狀、硬軟、高底、及び移動性の有無等を知るべし

第三子宮膣部に就きては其長短、形狀、硬軟、等を檢すべく子宮口部に在ては形狀、口緣の狀況及び既に開大せるや否や及び開大の程度等を診すべし

第四全膣に就て膣腔の廣狹及び其延張性耻骨弓の廣狹を詳かにせんことを要す

第三項　雙合檢査法

雙合檢査法とは一手の示指を內診に於けると同方法によりて膣內に送り同時に他手を腹壁上に貼し子宮又は胎兒を下方に壓し之を內手との間に狹み子宮の大さ形狀硬軟及び胎兒部分并に其移動性等を明かに觸診するものを云ふ此法は殊に妊娠初期に於て必要にして未だ恥骨縫際上に出でざる子宮の狀態を知らんには此法によるの外なしと雖ども助產婦は猥りに施すべきものにあらず

第二十五章　檢査法に於ける一般の注意

第一檢査を施す前には豫め膀胱及び直腸を空虛ならしむべし

第二檢査の際は無用の體部を露出すべからず其他總て妊婦の嫌ふことは成るべく避くべし殊に無用の人を近けざるを要す

第三檢査は一度の往診に一回となし再三反覆して施す樣のことあるべからず

第四外檢査法は妊婦を診する每に丁寧に之を行ひ成るべく內診の必要なからしむべし

第五　内診は止むを得ざる場合の外之を行ふべからず一度綿密なる注意を以て内診を施せば能く其檢知せる所を記憶すべし而して助産婦の通常内診すべき時期は胎胞破裂直後と産褥第九日目との二回なりとす若し分娩後九日を經ずして異常の狀態を來したる時は内診せずして速に醫の診を乞ふべし

第六　助産婦若し産褥熱其他細菌の傳染に由て發すべき病者を取扱ひたる時は此等患者を遠ざかりてより一週間の後ちにあらざれば妊婦、産婦、褥婦等を診査すべからず而して一週間後に於て診察する際には先づ沐浴し新しき衣服と交換し手指は特に嚴密なる殺菌法を施行せざるべからず

第七　此等の病家に至り檢査するには其前必ず衣服を交換し全身浴を行はんことを要す凡て屍體に接觸したる時も亦之に準すべきものなり

第八　助産婦の内診すべき手指に損傷疣潰瘍化膿等ある時は之を禁ず

第二十六章　初妊婦及び經妊婦の診斷

初妊婦及び經妊婦　の區別は通常問診によりて知り得べしと雖も未だ結婚せざるもの若しくは結婚前の妊娠に屬する時は妊婦之を掩蔽することあるが故に之を檢知せざるべからず其主なる鑑別點は左の如し

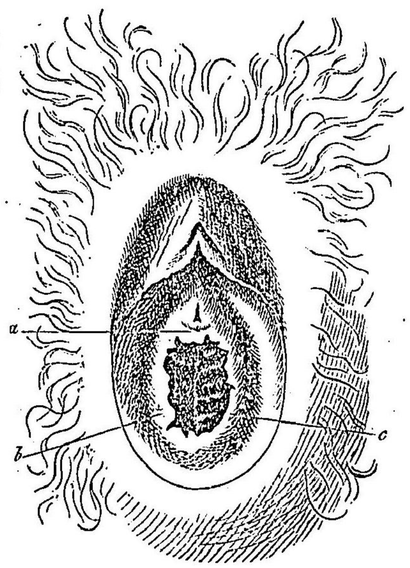
初妊婦　　經妊婦

第一　處女膜根存す　　處女膜消失しミルチ狀肉阜を現す（第三十六を見よ）

（第三十五圖を見よ）

第二　會陰に損傷なし　　會陰破裂の瘢痕あり（但し完全なるものもあり）

第三　初妊婦の膣入口



abc 處女膜輪

第三　膣腔狹く皺襞多し

第四　子宮口は圓形にして妊娠末期に至るも閉鎖す

第五　子宮膣部は妊娠末期に至れば消失す

第六　膣腔滑澤にして皺襞少し

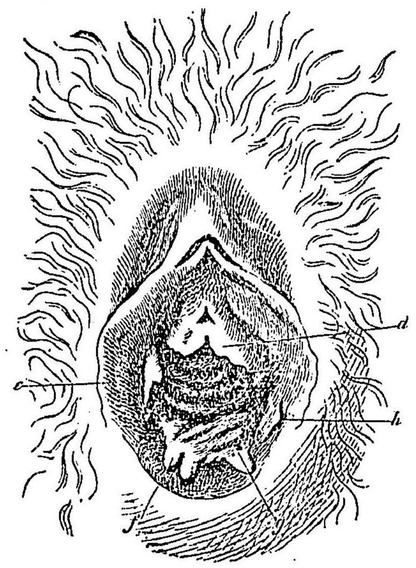
子宮口は横裂をなし妊娠末期に至れば指を通ぜしむ

第十箇月に至れば兒頭末期に至るも消失せず

第十箇月に至るも固定せず

第十箇月に至れば兒頭骨盤入口に固定す

第三　經妊婦の膣入口



hide ミルチ獸肉阜

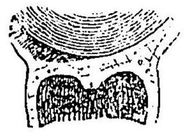
第七　帶青赤色なる一種の妊娠線を現す

白色にして舊き妊娠線と青赤色にして新らしきものと混じて存す

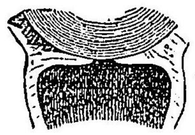
妊娠後半妊期中に於ける初妊婦の子宮膣部
（天然大の三分の一）

第三十七圖

第三十八圖

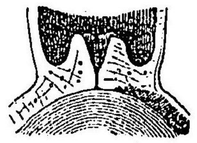


第三十九圖

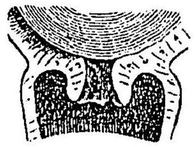


妊娠後半期中に於ける經妊婦の子宮膣部
（天然大の三分の一）

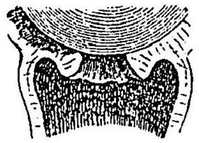
第四十圖



第四十一圖



第四十二圖



第二十七章　胎兒死亡の徵候

胎兒果して死亡する時は從來明かに感知せられたる胎動全く止み且つ反覆注意して診査するも心音臍帶雜音及び胎動音は共に聽取することを得ず而して羊水の吸收により子宮は漸次に變小し柔軟となる膣內よりは多量の分泌物を漏し妊婦は倦怠消化不良下腹寒冷時々惡寒等を感じ時としては母體の動搖に從ひ異物の腹內に移動するが如きを訴ふ乳房は漸々弛緩するに至るべし

第二十八章　數胎

數胎とは同時に二兒以上妊娠するを云ふ之に二胎即ち雙胎三胎四胎五胎等の別あり此中最も多きは雙胎にして凡そ八十九回の分娩中一回ありと云ふ

雙胎の原因　雙胎は二個の卵同時に受胎するに由て來るものあり或は一個の卵中に二個の精蟲進入して之を生ずるものあり前者を二卵性雙胎と云ひ後者を一卵性雙胎と稱す其他の數胎に於ても之に同しき理由により成生するものとす

雙胎に於ける卵膜及び胎盤の關係　羊膜は胎兒外皮の一系なるを以て其一卵性或は二卵性なるに關せず各別に之を有すべく

絨毛膜は卵の外圍より生ずるを以て二卵性のものにありては各別に存在すと雖も一卵性のものは一の絨毛膜中に二個の胎兒を容るゝものなり

脫落膜　は二卵性雙胎に於ても單一なるを常とすれども各卵の附着部遠隔せば時として各別に飜轉脫落膜を發生することあり

胎盤　は其原各胎兒より發生するものなるを以て各別に存すべきものなれども多くは互に接合し殊に一卵性のものにありては兩胎盤血管は吻合し交通を現すものなり

雙胎に於ける男女兩性の關係　一卵性雙胎なる時は常に其性を等すと雖も二卵性雙胎なる時は一定せずして同性なることなり或は異性なることあり

雙胎の診斷　は決して容易なるものにあらず之を診定せんには左の徵候に注意すべし

第一　腹部の異常大　妊娠月數に適應せざる腹部の膨大は最初に雙胎の疑を生せしむべく且つ妊婦の苦悶は通常のものより甚だし

第二　腹部の中央に凹溝を生ず　是兩個の胎兒境界部なり此等の二徵候は羊水多量なるか若くは腹內の腫瘍を生ずる時は亦之を現すにより確實なるものにあらず

第三　兩胎兒の體部を明かに觸知す　是れ雙胎の確徴とも云ふべきものにして即ち外檢査により二個の兒體部を明かに觸知し得べき場合例之ば二個の兒背を兩側に觸れ又は頭部子宮底に存在するに關はらず尚骨盤上に於て他の一個を觸るゝ時は其雙胎たるや疑なきなり

第四　二箇所に於て同強の心音を聽取す　心音を聽診するには殊に注意して行ふべし今若し腹部の兩側に心音を聽取するも之を以て直ちに雙胎なりと斷定すべからず何となれば心音は能く一側より他側に傳へ得ることあればなり然れども精しく之を聽診するに一個の心音他側に遠ざかるに從ひ漸次に微弱となり若くは全く消失し次で或る部に至れば再び高調となり以て明かに兩個の心音を區別し得れば雙胎の確診を下すことを得べし

第五　內診に由て診定す　即ち子宮口部に於て四個の小體部を觸知するか或は二個の卵膜を觸知する時は略其雙胎なるを知り得べし

第六　分娩時に於て知る　即ち一條の拇動なき臍帶脫出せるに係はらず腹部に於て心音を聽取し得べき時又は同名の手或は足二個を觸知し得る時或は一兒分娩するも子宮變小せずして尚一兒の存在を診知し得る等之なり

第二十九章　妊娠の攝生法

妊娠は原と疾病にあらずと雖も甚だ之に犯され易きを以て殊に其攝生法に注意せざるべからず

第一　飲食物　妊娠は平素習慣せる生活法を變せざるを可とす故に飲食物は凡て從來の習慣に從ひ唯其量の度に過ざる樣注意すべし特に晩餐は少量にして消化し易き食物を撰ぶべし大根豆類芋類の如き風氣を釀すべき不消

化物又は強き香料即ち芥子胡椒蕃椒及び酸味多き菓物例之ば不熟なる蜜柑又は夏蜜柑其他強烈なる酒類濃厚なる茶珈琲等の如きは害あるを以て避くるを要す妊婦の希望する飲食物にして害なきものは與ふるを可とす若し妊婦嘔吐ある時は消化し易き食物を與へ數回食に就かしむるを以て良なること有り早朝の嘔吐には臥床内にありて牛乳其他の滋養品を食せしめ一時間を經て起床せしむべし

第二　排便及び排尿

妊婦は多く便秘を來すものにして若し之あらば務て室外の運動を營ましめ熱したる菓物又は煮たる菓物を食せしめ寢時及び早朝其他一日數回時間を定めて一杯の清水を飲用せしむべし殊に其空腹時を良とす此の如くするも尚ほ不通なる時は温石鹼水を以て灌腸を行ひ或は醫の診を請ひ下劑を服せしむべし

尿は妊娠の第四箇月及び十箇月に於て頗る頻數の感あるものなれば其度毎に速に排泄せしむべし尿蓄積し膀胱緊滿するは宜しからず

第三　業務

も亦從來の習慣により平時の如く營ましむべし唯必らず其過劇なるを避くを要す而して妊娠三四箇月間は最も流産し易きが故に大に注意すべし

第四　運動

適宜の運動は妊婦に取りて甚だ緊要なるものなり故に日々適當の時間を定め屋外に出て散歩すべし之に反して永く座し或は永く臥床にあり又は總て室内に於て仕事をなす等は害あり即ち之が爲めに消化不良を來し又は大便秘結し時として肛門に靜脈瘤を生じ又不眠症神經過敏症等を發す其他舞踏飛跳乘馬平坦ならざる道路の車行長途の流車旅行或は物を提げ又は荷ふ等凡て甚だしき身體の運動は大に害あり

第五　睡眠

は過度に且つ規則正しく營ましむべく決

して不定なることある可からず然ども若し甚だしく睡眠を貪るの時其意のまゝに放任せば血行障害及び消化不良等を發することあり

第六　精神の保養

妊婦は極て精神を安靜に保たしむべきものにして若し其分娩を憂うるが如き時は助産婦は温言を以て之を慰諭すべく且つ助産婦たるものは妊婦に向て難産畸形胎兒又は不幸なる分娩の事を語るべからず精神の劇しき感動は胎兒に危險を發するものなれば甚だしく驚き怒り恐れ其他非常の喜び悲しみ等は注意して避けしむべきことゝす

第七　衣服

妊婦の衣服は季節に應じ稍温暖なるを良とす總て狹く窮窟なる衣服殊に胸部腹部等を緊縛するものは用ゆべからず又勞働中は必らず之を緩めざるべからず但し之に代ふるに彈力性の胴卷を緩く締むるは害なきものなり又適當なる腹帶は妊娠の後半期に至れば必らず用ゆべく殊に經妊婦にありては最も必要なるものなり

腹帶の効は（一）妊娠子宮を支へ（二）懸垂腹を防ぎ（三）早産を豫防し（四）胎兒の位置の變化を防ぎ（五）妊婦の腹部を温保し（六）身體の運動を容易ならしむる等なり

第八　清潔法

も亦必要なるものにして妊婦は毎日一回適宜に温浴を營ましむべし然ども長時高温度の浴に入る時は子宮を收縮することあるが故に注意を要す虚弱なる妊婦にありては浴後一時間身體を安靜ならしむるを佳とす坐浴脚浴冷水浴又は頻回の温浴は禁ずべし然らざれば流産若しくは早産を致すことあり其他妊婦の頭髮は屢〻梳り襯衣及び敷布は時々清潔に洗濯せしむべし又妊婦の外陰部は妊娠末期に至れば分泌増加するが故に一日二三回づゝ微温湯を以て洗滌せしむるを要す膣内も亦多量の

分泌物ある時はイルリガートルを用ひ其嘴管を僅かに膣内に送入し一布仙の微温リゾール水を以て洗滌せしむべし

第九　交接は子宮に充血を來すべきものなるを以て流産を起こことあり殊に第八週乃至十六週の間は注意せんことを要す妊娠末期に至れば必らず行ふべからず然らざれば産褥熱其他の疾病を來すの危險あることを諭すべし又流産の癖ある婦人は交接は最も愼重ならしむべきものとす

第十　乳房は温暖に保ち衣服の壓迫を避けしめ乳頭は毎日二三回冷水を以て洗ひ且つ指を用て之を牽引して其形狀を佳良にし又時々其部に酒精を塗布して皮膚を強固ならしむべし

第四編　正規分娩及其取扱法

第三十章　分娩

分娩とは胎兒及び其附屬物即ち胎盤臍帶卵膜羊水等が自然の力によりて母體より排出せらるゝを云ふ胎兒を排出する所の自然の力は之を分娩力或は産出力と稱し主に陣痛と稱する一種の子宮收縮力より成り腹壓及び膣壁の收縮力も亦之を補助するものなり而して胎兒は此産出力により母體より排出せらるゝの際に於て必らず一定の道路を通過す産道即ち是なり分娩に二種の別あり

一　正規分娩とは胎兒及び其附屬物の排出幷に胎兒の通過すべき産道及び産出力等の異常なく所謂人の助を要せずして天然の力により自ら出産するものを云ふ故に又之を自然分娩或は安産と稱す

二　異常分娩とは前記胎兒及び附屬物又は産道或は産出力等に異常を生じ母體又は兒體に危險を來すの恐あるが爲めに人の助を要するものを云ふ故に之を人工分娩或は難産とも稱す

又分娩の時期に關し之を種々に區別す

一　定期産とは妊娠第三十九週以後第四十週迄に分娩するを云ふ

二　遲産とは妊娠第四十週以上にして分娩するを云ふ

三　早産とは妊娠第二十八週以後三十八週迄の分娩にして小兒は既に胎外に於いて生活を營み得べきものなり

四　流産とは妊娠第二十八週に至らずして分娩するを云ひ小兒は尚ほ胎外に於て生活し能はざるものなり然れども近時學術の進歩により種々の器械例之へば保育器の如きものを發明せられれば嚴重なる注意を與へて養育する時は極めて稀に生命を保ち得べし

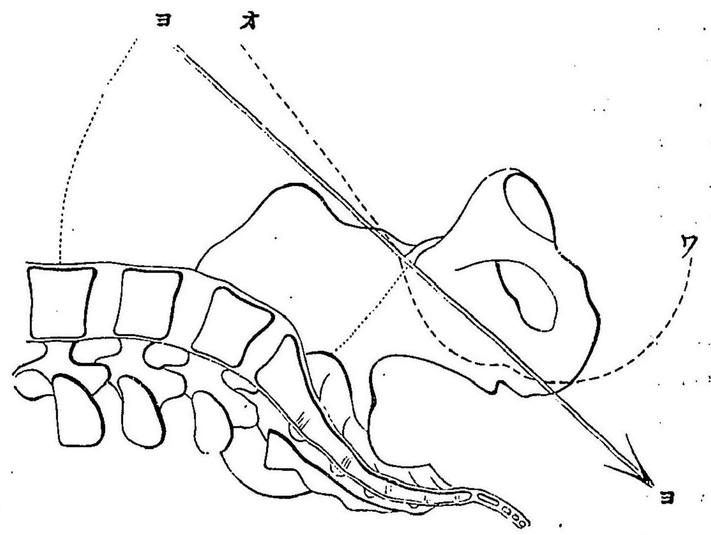
第三十一章　産道

産道は之を二種に分ち骨部産道及び軟部産道と云ふ

一　骨部産道とは即ち骨盤を云ひ小兒を通過せしむべき部位は管狀をなすを以て一に之を骨盤管と稱す而して此骨盤は分娩の際僅微の擴張を營むものなりと雖も其度甚だ僅少なるを以て著しき關係を有せず故に假りに之を一定不動のものと見做すを得べし

二　軟部産道とは骨盤の内部に位するものにして即ち子宮頸管子宮口膣及び外陰部を云ひ骨部産道に反し能く延長して胎兒の通過を自由ならしむ而して分娩の際會陰は著しく延長し爲に膣口は全く前方に向ふを以て軟部

第四十三圖



ワヲ、骨盤誘導線の方向
ヨヨ分娩力の方向（天然大の三分一）

産道の方向は骨盤の誘導線に從ひ前上方に向ふものなり故に胎兒は常に此の方向を以て娩出すべし是れ分娩の處置上注意すべき事とす

第三十二章　産出力

産出力とは陣痛腹壓及び膣壁收縮力の三者を總合せるものにして此力により胎兒を産出せしむ

一　陣痛

とは反覆發作する子宮の收縮を云ひ産出力中最も主要なるものなり而して其收縮する毎に産婦は疼痛を感ずべし此の如き陣痛の發作は不隨意にして産婦の意を以て之を制し或は之を促す事能はずと雖も時として精神の劇動により或は强く或は却て弱からしむる事あり又陣痛は温熱摩擦等の刺戟を子宮に施す時は之を催進せしめ得可し陣痛發作すれば子宮は收縮して漸次硬固となり遂に其極度に達すれば殆んど石の如く硬く且つ前方に突隆して球狀をなす故に此際手を腹上に貼すれば明らかに其收縮せる子宮を觸知し得可し而して其發作時に於

ける疼痛は始め弱く先づ腰部及び薦骨部に起り次第に強くなり進で下腹部に至り陰部を通過して上腿に及ぼし其極度に至れば子宮弛緩して再び舊形に復すと共に疼痛も亦緩解すべし

陣痛に三期の別あり進行期極期退行期と云ふ

進行期とは初め子宮の收縮徐々に起り漸次強劇となるの期を云ふ

極期とは收縮極度に達し暫時間此狀態に止まるの期を云ひ

退行期とは極期を終れる後ち其收縮再び徐々に弛緩するの期なり

此三期を經過すれば疼痛歇み筋肉弛緩して暫時休止す之を陣痛休歇時と云ふ而して其收縮の全經過は數分間に亘ると雖も一陣痛中疼痛を感ずるは僅かに六十秒乃至百秒なりとす又陣痛は分娩期の進むに從ひ其強さと發作數を增加すれども其持續時は却て短縮すべし此の如く陣痛に發作及び休歇あるは最も緊要なる事項にして之が爲めに能く胎兒を下行せしめ娩出するを得可し若し絶えず子宮收縮する時は決して産出せしめ能はざるものとす妊婦は又腸加答兒痙攣或は腸内に風氣の發生したる時若しくは便秘したる時其他種々の原因によりて屢〻下腹部に疼痛を發することあるを以て是を陣痛と混同せざる樣能く注意すべし此の如き腹痛を假陣痛と名く

分娩痛とは子宮の收縮する際に發する疼痛即ち陣痛と胎兒が軟部産道を通過するの際著しく之を延長し且つ骨盤壁に壓するが爲めに發する疼痛との二者を合せて稱するものなり故に分娩痛は兒頭將さに外陰部を出でんとするに當り最も强しされば陣痛と分娩痛とは決して同一

なるものにあらざるなり

二　腹壓　とは腹壁の筋肉緊張するによりて生じ隨意に之を營み得べきも分娩の末期殊に兒頭將に産出せんとするの際には不隨意に起り産婦自ら之を制することは能はざるに至る而して此腹壓は大に陣痛を助けて胎兒の娩出を容易ならしむを以て産出期に於ては缺くべからざるものなり今分娩に際し兒頭既に膣中に下り陣痛發作するや産婦は膝關節を屈し兩足を臺上に支へ且つ手に物體を握り深き吸氣を營み以て呼吸を停止し同時に腹筋を強く收縮せしめ大に努責して之を壓出せんとす是れ即ち腹壓なり而して陣痛休歇すれば腹壓も亦共に止むに至るべし

三　膣壁の收縮力　は敢て緊要なるものに非ず只後産を膣内より排出するの作用を有するのみ

第三十三章　正規分娩の經過

分娩　は常に一定の前徴ありて而して後に來るものなり前徴とは

一　前陣痛　の發作強く且つ頻々となる事にして妊娠の後半期に於ては時々子宮に收縮を發すと雖甚だ弱くして妊婦は之を自覺するに至らず然れども末期に達すれば疼痛を伴ひ妊婦は其收縮を感ずるに至る是即ち前陣痛なり（後章參照）而して此陣痛は漸々強劇となり頻發して殆んど眞の陣痛と區別し能はざるに至れば既に分娩の切迫せるを知るべし

二　外檢査　を行ふに兒頭は深く骨盤内に下降し全く固定せらる

三　内檢査　を施すに初産婦にありては子宮膣部は殆

んど消失して紙の如く薄くなり外口は僅かに哆開す經産婦に於ては內口も亦開きて全頸管は既に指を通ぜしむるに至る然れども子宮膣部は短縮するのみにして消失することなし而して兒頭は初産婦に於ては頗る固定すべし

四　膣壁は弛緩して柔軟となり著しく粘液の分泌を增加す

五　妊婦は身體の運動に困難を感じ且つ頗る兩便共に頻數を訴ふ

以上の分娩前徵に次で正しき陣痛を發し子宮口の開大を始む之れ即ち分娩の初期にして之より其婦人を産婦と名く

分娩の經過を分ちて三期となす即ち第一開口期第二産出期第三後産期之なり

第一　開口期

開口期とは正しき陣痛の發作に始り子宮口全く開大するに至るの期にして此陣痛を開口期陣痛と云ふ今開口期の順序を述ぶれば左の如し

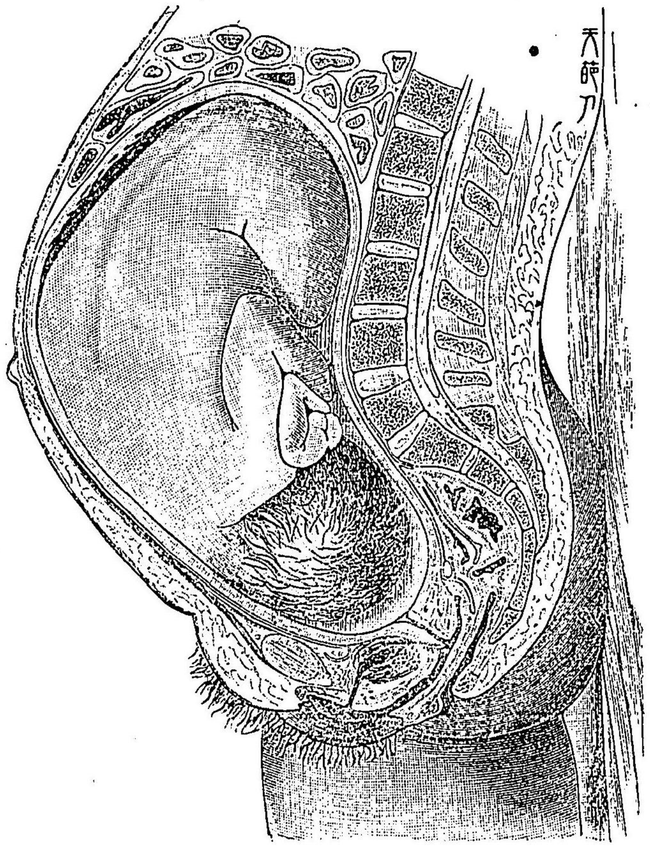
一　開口期陣痛の發作

分娩の前徵完備し陣痛は凡そ十五分乃至二十分時を經て正しく發作するに至れば即ち前陣痛より開口期陣痛に移行せるものなり此陣痛の始めに於ては下腹部及び腰部緊滿の感覺著しきも疼痛は甚だしからずして且つ弱し次で漸次强劇となり其度數を增加し凡そ三分乃至五分間毎に反覆發作す此時に至れば疼痛又著しく增すものなり

二　胎胞の形成

開口期陣痛の發作するに至れば下方に存する卵膜の一部分剝離せらるゝものにして此際羊

第四十四圖



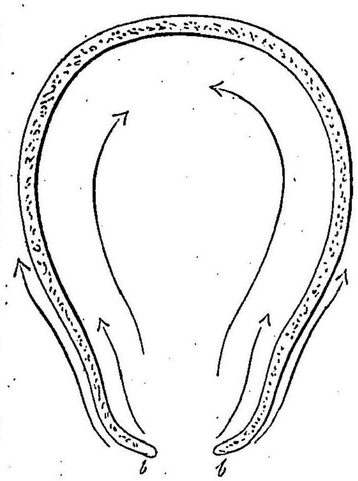
開口期の初めに於ける子宮及び子宮頸管

水は陣痛の爲め下方に壓せられ其一部は兒頭と卵膜間を通じて下方に集まり剝離せる卵膜を球狀に膨出せしむ而して頻回の陣痛發作により此中の羊水は漸々增量するが爲めに益ゝ膨大して子宮頸管內に進入し遂に子宮外口に達し以て之を開大す此の如く卵膜の一部分が子宮外口部に膨出せるものを胎胞と稱し此中に存する羊水を前羊水又は第一羊水と云ふ

三　子宮口の開大

子宮口は二種の力によりて開大せらるゝものなり即ち第一は開口期陣痛の力にして其發作毎に子宮口緣は緊張して薄くなるのみならず漸々上方に牽かるゝが故に子宮口は次第に開大すべし第二は胎胞の力にして漸次膨大するが爲め子宮口は自然に上方より壓開せらるゝものとす而して胎胞の形成せらるゝ際子宮口は陣痛の力により既に二錢銅貨大に開大せるものにし

第四十五圖



子宮開口期の狀況（天然大の五分一）

ては腟内の分泌頗る増多し初め透明粘液様なれども胎胞形成の爲め卵膜の一部分剝離するのみならず其膨大によりて子宮口開大せらるゝに際し口緣甚だしく緊張して遂に小裂傷を生ずるとにより血液を混ずるに至る

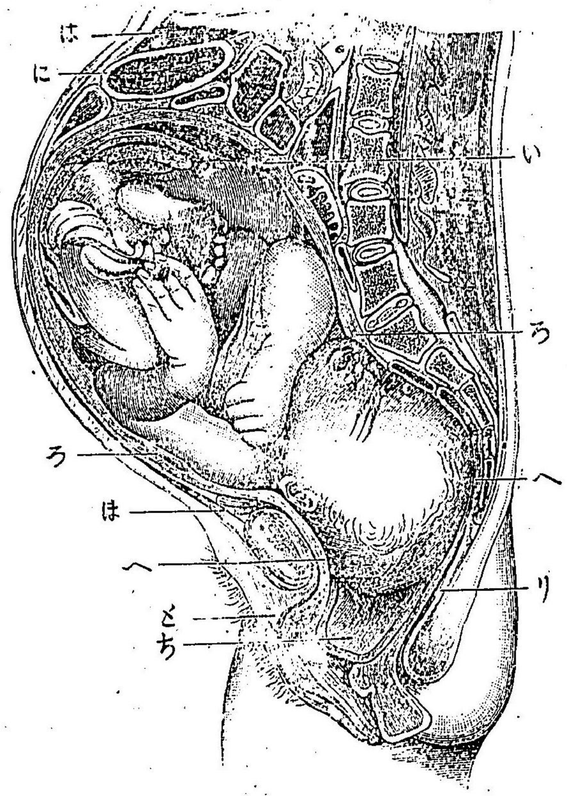
五　胎胞の緊張及び破開

胎胞は始め陣痛時に於ては緊張膨出すと雖休歇すれば子宮弛緩するを以て前羊水は再び子宮腔内に歸るが故に胎胞亦弛緩す此際内診する時は直徑十仙迷の大さを有し腟と一管を成すべし

四　分泌物の増多及び血液の混入

開口期に於て其全く開大する

第四十六圖



胎胞の形成
い、胎盤
ろ、收縮輪
は、肝臟
に、胃
ほ、膀胱
へ、外子宮口
と、尿道
ち、胎胞
り、直腸

時は能く卵膜を隔てゝ胎兒の先進部を觸知することを得べし然れども開口期の終りに至れば兒頭深く骨盤内に下

降するが爲めに之と卵膜間に於ける腔隙を鎖し陣痛休歇時と雖前羊水をして子宮腔内に歸流するを得ざらしむるを以て絶えず緊張す此際子宮口は既に直徑七仙迷以上に開大せり此の如く胎胞弛緩せざるに至れば之を形成せる卵膜は遂に其緊張に耐ゆること能はずして破裂し以て前羊水を漏す之を破水と云ふ前羊水の量は八乃至十五瓦なり

第二　産出期

産出期　は子宮口の全開大に始まり胎兒の娩出に終るものにして左に其順序を述べん

一　産出期陣痛の發作　破水の後ち陣痛少時休止し次て開口期陣痛より也更に強く且つ其發作時間永くして休歇時少なき所の陣痛を來す之れ即ち産出期陣痛なり此の陣痛は益ゝ強劇となり頻發し遂に兒頭將に陰門を出でんとする時は最も劇烈にして全身震戰するに至る之を震戰陣痛と稱す又羊水は陣痛の發作毎に僅かづゝ漏泄して産道を濕し滑澤ならしむるものなり

二　産瘤の形成　産出期陣痛發するに至れば兒頭は著しく下降するものにして其産道を通過するに當り兒頭の下向部は劇しく周圍より壓迫せらるゝが故に血液此部に鬱滯し漸々腫脹す之を産瘤と云ふ故に此部の皮膚は暗紫色を呈すべく殊に其大なるものに著るしとす産瘤は産出期の經過愈ゝ長きときは又益ゝ大となるも之に反し其經過甚だ短きときは發することなし

三　腹壓の發起　兒頭深く膣内に下る時は産婦は兒頭を壓出せんが爲めに近傍にある物品に手足を支へて呼吸を止め強く努責す之れ即ち腹壓なり此腹壓は幾分か産婦

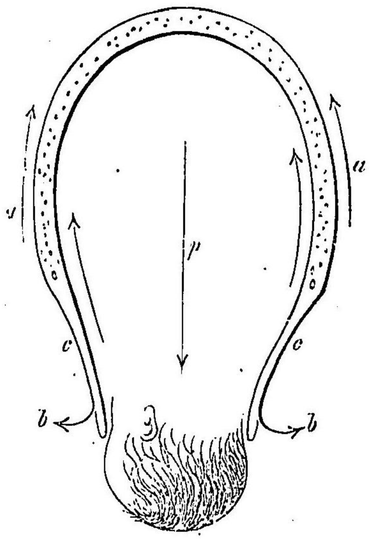
をして陣痛に堪へ易からしむるものとす此の如き際診すれば陣痛發作時に於ける兒頭の下降は頗る明かに觸知し得べく休歇時には少しく退却するを診知す可し而して兒頭既に陰門を出でんとするに至れば陣痛は最も劇烈となり同時に腹壓も亦不隨意に發す此の如き強き陣痛及び腹壓の發作時に於ては產婦の苦悶は最も極度に達し顏面潮紅口唇青色となり且つ乾燥し全身冷汗を流し遂に震戰するに至る即ち震戰陣痛と

四　兒頭の排臨

兒頭益〻下降する時は膀胱直腸を壓迫するが爲め頻りに利尿排便の感覺を催ふし會陰は甚だしく延長膨出せられ長さ廣さ共に平素の二倍に達し且つ頗る菲薄となり肛門は哆開轉す故に若し此際直腸內に大便在る時は不知不識之を漏すことあり而して兒頭愈〻下降し陣痛の發作時には其一部陰裂間に現はれ陣痛止めば再び膣內に退き數回反覆して外陰部を開張せしむ此の如く兒頭が陣痛に從て現はれては退き退きては又現はるゝを排臨と云ふ

第四編　正規分娩及其取扱法　第三十三章　正規分娩の經過　二一七

第四十七圖



娩出期に於ける陣痛の狀況
（天然大の五分一）

五　兒頭の發露及び產出

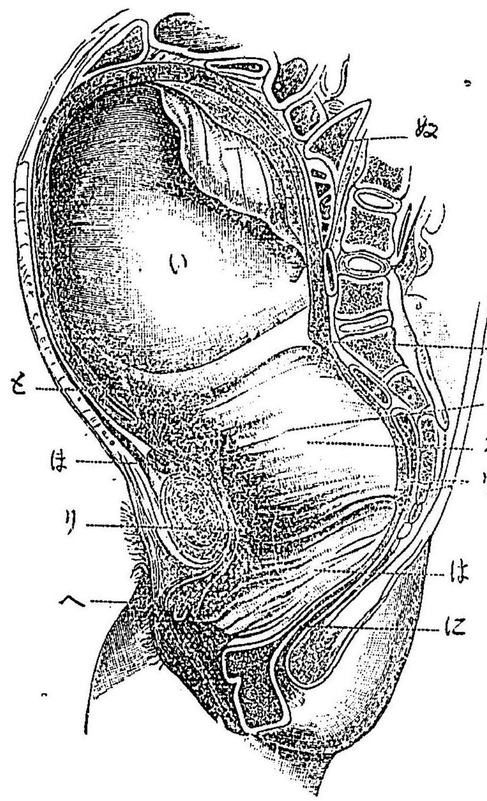
兒頭排臨し陰門全く壓開せらるゝ時は陣痛休歇時と雖再び退くことなきに至る此の狀態を發露と云ふ次で起る強き陣痛により兒頭は全く產出す此際は知覺過敏なる陰門が強く開張せらるゝを以て分娩經過中最も疼痛の劇しき時なり又時として兒頭の將

さに發露せんとするに際し分娩遲延する時は更に頭部は陰裂間に絞搾せられて腫脹す之を第二產瘤と云ふ

六　兒體の產出

兒頭產出すれば陣痛暫時休止し產

第四十八圖



產出後に於ける子宮の縱斷面

い、子宮體
ろ、子宮頸
は、膣
に、直腸
ほ、膀胱
へ、尿道
と、收縮輪
ち、子宮內口
り、子宮外口
ぬ、胎盤

婦は爽快を感ずと雖又直ちに次の陣痛發して肩胛を出し其餘の體部は難なく娩出す此の如く兒體の產出は頗る容易なるものにして僅かに二三回の陣痛にて足れりとす之れ產道は既に兒頭產出のために充分開大せらるゝを以てなり又時としては兒頭と共に兒體を一頓に娩出せしむることあり

七　後羊水の流出

兒體產出すれば殘餘の羊水は僅かに血液を混じて流出す之れを後羊水又は第二羊水と云ふ

第三　後產期

後產期とは胎兒の娩出後より後產の全く排出し終るまでを云ふ其順序次の如し

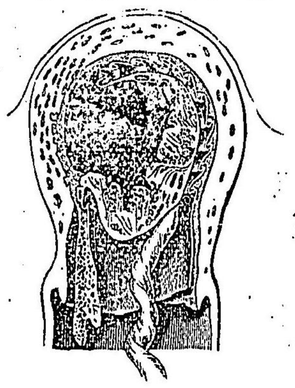
一　產婦著しく爽快を感じ

胎兒全く娩出すれば產

婦の苦悶は忽ち消失し頗る爽快を感じ此際時として惡寒を覺へ或は著しく寒戰することあり

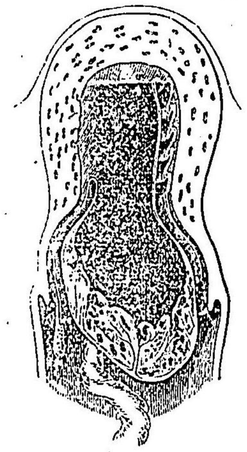
二　後産期陣痛の發作　胎兒娩出後一二分若くは十五分間を經れば再び子宮の收縮を來す之を後産期陣痛と云ふ此陣痛は開口期或は産出期陣痛よりも其疼痛遙かに微弱なるものなり

第四十九圖



後産娩出の狀況
（天然大の五分一）

第五十圖

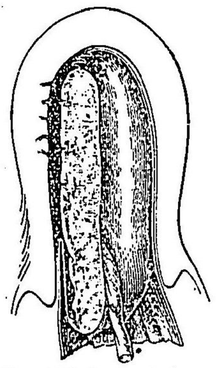


後産娩出の狀況（天然大の五分一）

三　胎盤の剝離　後産期陣痛を發する時は胎盤は全く子宮內面より剝離し漸々下方に壓出せらる之と共に卵膜も亦剝離するものなり

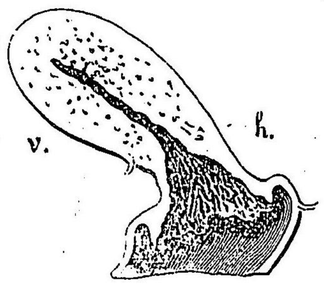
四　胎盤剝離に由る出血　子宮の血管は胎盤部に於て網の如くなり此の中に進入せるを以て今胎盤が子宮壁より剝離せらるゝときは其血管は斷裂して出血するに至る故に陣痛發すれば此血液は迫されて腟內より流出するものなり又子宮の血管は多少卵膜にも移行せるを以て其剝離に際しても僅少の出血を現すものとす然れども此出血は胎盤及び卵膜が全く剝離すれば子宮の收縮によりて血管の斷裂口は自

第五十一圖



後産の剝離及び排出の狀況
（天然大の五分一）

第五十二圖



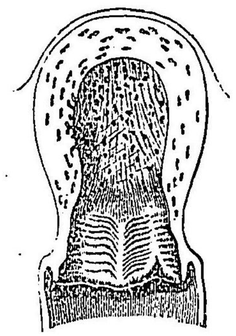
後産排出し空虛となれる子宮を前後に縱斷したる者
（天然大の五分一）

然に壓閉せられて止血するものなり故に若し子宮の收縮充分ならずして斷口閉鎖せらるゝことなければ危險の大出血を來すに至るべし

五　後産の産出

後産期の陣痛によりて剝離せる胎盤は次第に下降し卵膜は翻轉して其子宮面を包み胎兒の面を現はして遂に膣内に出で膣壁の收縮力により外部に産出せらる時としては卵膜翻轉せずして其子宮面を包むことなく娩出することあり後産既に産出すれば子宮は硬き球形を成し其底は恥骨縫際上凡そ四指横經の高さにあり

第五十三圖



後産排出し空虛となれる子宮左右に縱斷したる（天然大の五分一）

第三十四章　分娩の持續時間

人々により種々の差あるものにして即ち陣痛の強弱産道の廣狹胎兒の大小等に關係するものなり故に經産婦は既に其産道一旦開大せられたるが爲め抗抵弱く初産婦の凡そ半分の時間を以て娩出せらるべし日本人に於ける分娩の時間は初産婦凡そ十二時間經産婦は日本人よりも分娩時間を要すること西洋人に在りては日本人よりも亦長時間を要するものと開大すること遲きが爲めに分娩も亦長時間を要すること西洋人に在りては日本人よりも分娩時間を要すること多く初産婦凡そ二十時間經産婦凡そ十二時間なりと云ふ又分娩各期中最も長きは開口期にして初産婦に於て凡そ九時間を要し産出期は二時間を要するのみ經産婦は此二期に於ては著しき短時間を以て分娩するものなり後産期に於て胎盤の膣内に排出せらるゝには後産期陣痛發作後三十分を要するものなれども既に膣内に出づれば爾後只

膣壁の收縮のみを以て娩出せらるゝが故に若し自然に放置する時は一時間乃至一時間半を費し始めて後産全く産出するものなり然れども胎盤膣内に達すれは多くは人工に補助し之を娩出せしむるを以て斯の如く長時間を費すことなし

又晝夜出産數の差異

時には出産數最も多く之に反して晝間十二時乃至三時には其數最も少しと云ふ

木下博士が調査したる日本婦人の分娩時間は左の如し

一　本邦婦人に於ては歐洲婦人に比すれば其全時續時間に於ては約三分の一短縮を見るも主として第一期に於て短かく第二期第三期に於ては少しく長時間を要するを見る

二　更に之を初産婦經産婦に於て比較するに共に第一期に於ては著しき短縮を認むるも第二期は本邦初産婦に於ては殆んど五と七との比の如く長きを見本邦經産婦に於ては殆ど歐洲婦人と近似す即ち初産婦の分娩は歐洲婦人より困難なるべきに經産婦の分娩は歐洲婦人と大差なしとす

(三)　第三期に要する時間もシュレー氏の調査に比すれば本邦婦人に於ては大凡之に倍する時間を要す

(四)　破水の時間子宮口開大以前にあるものウルト氏の歐洲婦人に就て述べたる所よりは五％少く子宮口全開大の後又は殆ど同時に破水するもの

(五)　本邦婦人の分娩に於ても初生兒の體重の大なるに從ひて第二期に長時間を要すること歐洲婦人に於けるが如し

(六)　産婦の年齡に關しては初産婦は年齡の增加に從ふて第二期には時を要すること大なるも經産婦に於ては年齡の關係に因りて分娩時間に一定の影響あることを見出すこと能はす

(七)　本邦に於ては初産は二十一歳より二十五歳までのものに最も多く初産婦の大凡五四％を占む之に次くものは二十歳未滿のものにして大凡三一％を占む所謂高年初産婦に至りては甚だ稀にして％に達せず

(八)　第一胎向頭蓋位の分娩に於けるよりも第二胎向頭蓋位に於ける分娩に

は第一期は殆ど常に時間を要すること多く第二期に於ては常に長き時間を要す此關係に就ては尚研究を重ぬることを要す

(九)陣痛の開始すること午前零時より午後三時の間にあるもの最も多く午前九時より午後零時の間にあるもの最少く一般に夜間は多く晝間は少し其比六三、四に對し三六、七なり

(十)兒童の分娩(第二期の終)は午前零時より午前三時の間にあるもの最多く午後零時より午後三時の間にあるもの最少なく夜間に於けるものは晝間に於けるものより多く其比五五に對する四五なり

第三十五章　陣痛の種類及其作用

陣痛の種類幷に其作用は既に前章に述べたるを以て再び茲に論ずるは頗る煩しきが如しと雖更に其要點を詳述するは受驗者の爲め敢て無用にあらざるべし

陣痛は時期に從て各々其名稱を異にす

第一　前陣痛又は前驅期陣痛

とは妊娠の末期に於て屢〻子宮に收縮起り且つ疼痛を伴ふものを云ふ其疼痛は常に甚だ弱くして往々妊婦全く之を感ぜざることあり又時としては非常に強く將に分娩するにあらざるやの疑を起さしむることあり然れども眞の陣痛ならざるを以て分娩を催進することなく多くは直ちに或は數時間の後ちに消失すべし稀に此の如き陣痛に引續きて眞の陣痛を發することあり而して此前陣痛の發作頻回にして且つ強くなる時は是によりて分娩期日の數日に近けるを想像し得るものなり故に此陣痛は專ら分娩の準備をなす者にして左の効用あり

(一)分娩の前徵となり其期日を豫定し得べし

(二)胎兒の位置を矯整して分娩し易からしむ即ち子宮收縮する時は其内腔の横徑減じて縱徑を增加す故に假令斜めに位する胎兒と雖是によりて矯整せられ縱位となり

らしめ大に分娩に便ならしむるものなり

(三)兒頭を骨盤入口に進入せしめ茲に固定するの用をなす

第二　開口期陣痛　開口期に發し著しく兒頭を下降せしむるものにあらずして左の作用を有す

(一)胎胞を形成せしむ

(二)子宮口を開大す

第三　産出期陣痛　産出期に發するものにして專ら胎兒を下降せしめ之を娩出するの作用を營むものにして此陣痛强盛すれば震戰陣痛となる

第四　後産期陣痛　後産期に發するものにして左の作用あり

(一)胎盤を剝離せしむ

(二)後産を膣内に排出せしむ

第五　後陣痛　後産娩出後即ち産褥期に發する子宮の收縮にして强きものと弱きものとあり左の作用を有す

(一)子宮を收縮して舊に復せしむ

(二)胎盤剝離面の血管斷裂口を閉塞して出血を防ぐ

(三)惡露を排出して子宮腔内に停滯せざらしむ

第三十六章　胎兒の位置幷に其分娩との關係

第一　胎兒の位置

胎兒の位置　即ち胎位を大別して縱位及び横位となし胎兒の斜めに位するものを斜位と云ふ然れども斜位は多く横位に變じ易きを以て此兩位置を單に横位と云ふも可なるべし又更に之を幾多の位置に小別す即ち左の如し

- 胎位
  - 縦位
    - 頭位
      - 頭蓋位
        - 前頭位
        - 後頭位
      - 顔面位
    - 臀位
      - 全臀位
      - 不全臀位
      - 膝位
        - 全膝位
        - 不全膝位
      - 足位
        - 全足位
        - 不全足位
  - 横位
    - 肩位
    - 背位
    - 腹位

又各胎位は兒背の向ふ所により概して四種に區別することと左の如し

- 頭蓋位
  - 第一　頭頂は兒背の左前方に向ふ
  - 第二　頭頂は兒背の右前方に向ふ
  - 第三　頭頂は兒背の左後方に向ふ
  - 第四　頭頂は兒背の右後方に向ふ
- 顔面位
  - 第一　顔面は兒背の左前方に向ふ
  - 第二　顔面は兒背の右前方に向ふ
  - 第三　顔面は兒背の左後方に向ふ
  - 第四　顔面は兒背の右後方に向ふ
- 骨盤端位（臀位）
  - 第一　臀位は兒背は母體の左前方に向ふ
  - 第二　臀位は兒背は母體の右前方に向ふ
  - 第三　臀位は兒背は母體の左後方に向ふ
  - 第四　臀位は兒背は母體の右後方に向ふ
- 横位
  - 第一　横位は兒頭は母體の前方に向ふ
  - 第二　横位は兒頭は母體の後方に向ふ
  - 第三　横位は兒頭は母體の右方に向ふ
  - 第四　横位は兒頭は母體の左方に向ふ

頭蓋位に於ては第一及び第二位を後頭位と稱し第三及び第四位を前頭位と云ふ又顔面位は通常第一及び第二顔面位のみを稱し第三及び第四は之を省く何となれば此位置は純粹の不良位にして甚だ稀れなればなり胎兒若し此位置を取る時は全く分娩し能はざるものとす

以上の區別法を用ひずして左の如くするものあり

兒背左前方に向ふもの　第一胎向第一分類

兒背左後方に向ふもの　第一胎向第二分類

兒背右前方に向ふもの　第二胎向第一分類

兒背右後方に向ふもの　第二胎向第二分類

今之を前法と對照するに第一頭蓋位は後法の頭蓋位第一胎向の第一分類に相當し第二頭蓋位は第二胎向の第一分類と等しきものなり此の如く後法は頗雜なるが故に多く前法を稱用せらる

第二　各胎位に於ける分娩の多少

胎兒は縱位に於てのみ產出し得べきものにして横位なる時は通常娩出することなし能はず然れども後者は幸に頗る稀なるものなり縱位中最も多數を占むるものは頭蓋位にして臀位之に次ぎ顔面位最も稀なり今其割合を示せば

西洋人（各專門家の平均概數）

頭蓋位	百回中　九十五回
臀位	三百三十回中　五回
顔面位	百二十回中　一回

日本婦人（下博士調査）

頭蓋位	九四、八六布仙
臀位	四、〇五布仙
顔面位	〇、七四布仙

なり又頭蓋位中最も多きは第一頭蓋位にして次で第二頭

蓋位とし第三及び第四頭蓋位は臀位よりも少なく顔面位よりも多數を占む然れども我が國に於ては第二頭蓋位多く凡そ二百五十六回の分娩中百回ありと云ふ然れども各專門家の統計に據り各異なりとす凡そ頭蓋位を占むること多き理由を述べんに胎兒は子宮腔内に於て一定の胎勢を成し其全體の形狀殆んど卵圓形を呈すべく子宮の内腔も亦同じく縱に長く卵圓形を呈するを以て自然の形態に應じて縱位を取り殊に頭部は兒體中最も重きが故に下降し次で頭蓋位となるなり

木下博士の統計に依れば第一胎向は六十五、三六布仙第二胎向は三十四、六四布仙にして余が調査せし成績に從ふも第一胎向は第二胎向より尙多數あり佐伯ドクトルの報告は第二胎向を多しとす

第三　各胎位分娩の難易

胎兒若横位を取る時は分娩最も困難にして僥倖なる場合に非ざれば全く出産し能はざるものなり故に其害甚だしくして母兒兩體に危險を及ぼし遂には生命をも失ふに至る而しこ縱位中最も分娩の容易なるものは第一及び第二頭蓋位にして第三第四頭蓋位(即ち前頭位)之に次ぎ第一第二顔面位は頗る難く第三第四に至ては全く自然に分娩を營み得ず臀位は母體に向ては著しき害を與へずと雖小兒に於ては頗る危險を來し易し就中全足位は困難にして膝位之に次ぎ臀位最も佳良なり又不全足位は全足位よりも容易にして危險亦少なし

第三十七章　正規分娩の器械的作用

骨盤は既に述べたるが如く各部分によりて其廣狹を異にせるを以て胎兒此内を通過するには其廣き部と骨盤

の廣き部と適合するにあらざれば容易く娩出し能はず正規分娩に於ては胎兒自然に回轉して兩者相適合し分娩を容易ならしむ此回轉を分娩の器械的作用又は分娩機轉と云ふ分娩の際最も娩出に困難なるは兒頭なるが故に其器械的作用を營むことも亦著しとす今解し易からしめんが爲めに第一頭蓋位に就て其器械的作用を詳述せん

諸姉は既に兒頭に就て矢狀縫合及び大小顱門の存在を知るべし此二者は分娩器械的作用の方向を示すに最も必要なるものなり而して第一頭蓋位に於て兒頭尚ほ骨盤入口上に存せるの際兒背は母體の左前方に向ふが故に後頭も亦骨盤の左前方に對し前頭は右後方に向へり然るに妊娠末期に至り前陣痛强盛すれば兒頭は下降して骨盤入口に進入し茲に固定せらるゝに至る此時兒頭は其最も長き徑線即ち矢狀縫合と入口の最も廣き徑線即ち横徑線と適合せしむ故に小顱門は入口の左方に大顱門は右方に在り次で開口期陣痛强盛し將に產出期に移らんとするに至れば兒頭は骨盤腔内に壓下せらる此際陣痛の力は兒背に及ぼし最も强く脊柱を壓す故に之を脊柱壓と云ふ而して脊柱の上端に附着するものは頭部なるを以て此脊柱壓は遂に兒頭に達すべし今正規の胎勢を案ずるに兒頭は屈伏の狀態を呈せるを以て此頭部に達したる壓力は止むを得ず後頭に及ぼし以て此部を壓下す故に頤部は益々胸壁に接し兒頭は益々屈伏の狀をなす之を第一回轉又は横軸回轉と云ふ此運動により兒頭は後頭を下降して骨盤腔内に進入す即ち兒頭は其最小なる小斜徑線の周圍徑を以て骨盤腔内に入りたるものなり

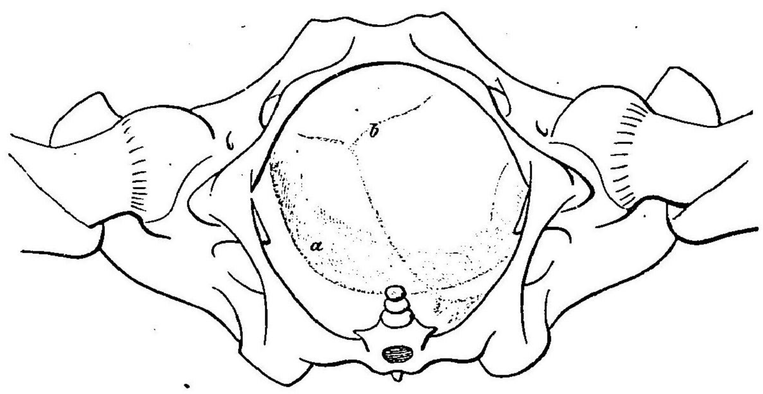
骨盤腔の徑線は入口に反し斜徑線最も廣くして横徑線は却て短小なるを以て矢狀縫合は斜徑線に一致せざるべ

徑線（一）は大にして左右の徑線（二）は小なり故に小骨盤腔の大なる左前方に門頭は大なる右後方に門頭は右回轉を致す而して右回轉は後方に位し矢狀縫合は斜徑に位し一回轉に至る故に小骨盤腔の左前方に門頭は第一回轉を終り次で第二回轉に至りて此の第二回轉は漸々進行し一致する

（一分三の大然天）況狀娩分の置位齧頭一第るけ於に口出盤骨

第五十四圖

小骨盤腔の大なる左前方に門頭は第一回轉を終り次で第二回轉に至りて此の第二回轉は漸々進行し一致する



況狀娩分の置位齧頭二第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第五十五圖

骨盤出口に至る出口に達する直徑線は平時に於ては短かし之に直徑線に一致する

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は右回轉を致す而して右回轉は後方に位し矢狀縫合は斜徑に位し一回轉に至る故に小骨盤腔の右前方に門頭は第二回轉を終り次で第三回轉に至りて此の第三回轉は漸々進行し一致する

（一分三の大然天）況狀娩分の置位齧頭三第るけ於に口出盤骨

第五十六圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第三回轉を終り次で第四回轉に至りて此の第四回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭四第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第五十七圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第四回轉を終り次で第五回轉に至りて此の第五回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭五第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第五十八圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第五回轉を終り次で第六回轉に至りて此の第六回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭六第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第五十九圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第六回轉を終り次で第七回轉に至りて此の第七回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭七第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第六十圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第七回轉を終り次で第八回轉に至りて此の第八回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭八第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第六十一圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第八回轉を終り次で第九回轉に至りて此の第九回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭九第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第六十二圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第九回轉を終り次で第十回轉に至りて此の第十回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭十第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第六十三圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第十回轉を終り次で第十一回轉に至りて此の第十一回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭十一第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第六十四圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第十一回轉を終り次で第十二回轉に至りて此の第十二回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭十二第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第六十五圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第十二回轉を終り次で第十三回轉に至りて此の第十三回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭十三第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第六十六圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第十三回轉を終り次で第十四回轉に至りて此の第十四回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭十四第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第六十七圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第十四回轉を終り次で第十五回轉に至りて此の第十五回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭十五第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第六十八圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第十五回轉を終り次で第十六回轉に至りて此の第十六回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭十六第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第六十九圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第十六回轉を終り次で第十七回轉に至りて此の第十七回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭十七第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第七十圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第十七回轉を終り次で第十八回轉に至りて此の第十八回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭十八第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第七十一圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第十八回轉を終り次で第十九回轉に至りて此の第十九回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭十九第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第七十二圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第十九回轉を終り次で第二十回轉に至りて此の第二十回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭二十第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第七十三圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第二十回轉を終り次で第二十一回轉に至りて此の第二十一回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭二十一第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第七十四圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第二十一回轉を終り次で第二十二回轉に至りて此の第二十二回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭二十二第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第七十五圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第二十二回轉を終り次で第二十三回轉に至りて此の第二十三回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭二十三第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第七十六圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第二十三回轉を終り次で第二十四回轉に至りて此の第二十四回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭二十四第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第七十七圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第二十四回轉を終り次で第二十五回轉に至りて此の第二十五回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭二十五第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第七十八圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第二十五回轉を終り次で第二十六回轉に至りて此の第二十六回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭二十六第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第七十九圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第二十六回轉を終り次で第二十七回轉に至りて此の第二十七回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭二十七第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第八十圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第二十七回轉を終り次で第二十八回轉に至りて此の第二十八回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭二十八第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第八十一圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第二十八回轉を終り次で第二十九回轉に至りて此の第二十九回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭二十九第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第八十二圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第二十九回轉を終り次で第三十回轉に至りて此の第三十回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭三十第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第八十三圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第三十回轉を終り次で第三十一回轉に至りて此の第三十一回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭三十一第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第八十四圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第三十一回轉を終り次で第三十二回轉に至りて此の第三十二回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭三十二第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第八十五圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第三十二回轉を終り次で第三十三回轉に至りて此の第三十三回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭三十三第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第八十六圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第三十三回轉を終り次で第三十四回轉に至りて此の第三十四回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭三十四第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第八十七圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第三十四回轉を終り次で第三十五回轉に至りて此の第三十五回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭三十五第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第八十八圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第三十五回轉を終り次で第三十六回轉に至りて此の第三十六回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭三十六第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第八十九圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第三十六回轉を終り次で第三十七回轉に至りて此の第三十七回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭三十七第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第九十圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第三十七回轉を終り次で第三十八回轉に至りて此の第三十八回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭三十八第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第九十一圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第三十八回轉を終り次で第三十九回轉に至りて此の第三十九回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭三十九第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第九十二圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第三十九回轉を終り次で第四十回轉に至りて此の第四十回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭四十第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第九十三圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第四十回轉を終り次で第四十一回轉に至りて此の第四十一回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭四十一第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第九十四圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第四十一回轉を終り次で第四十二回轉に至りて此の第四十二回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭四十二第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第九十五圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第四十二回轉を終り次で第四十三回轉に至りて此の第四十三回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭四十三第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第九十六圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第四十三回轉を終り次で第四十四回轉に至りて此の第四十四回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭四十四第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第九十七圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第四十四回轉を終り次で第四十五回轉に至りて此の第四十五回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭四十五第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第九十八圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第四十五回轉を終り次で第四十六回轉に至りて此の第四十六回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭四十六第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第九十九圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第四十六回轉を終り次で第四十七回轉に至りて此の第四十七回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭四十七第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第四十七回轉を終り次で第四十八回轉に至りて此の第四十八回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭四十八第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百一圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第四十八回轉を終り次で第四十九回轉に至りて此の第四十九回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭四十九第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百二圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第四十九回轉を終り次で第五十回轉に至りて此の第五十回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭五十第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百三圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第五十回轉を終り次で第五十一回轉に至りて此の第五十一回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭五十一第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百四圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第五十一回轉を終り次で第五十二回轉に至りて此の第五十二回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭五十二第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百五圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第五十二回轉を終り次で第五十三回轉に至りて此の第五十三回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭五十三第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百六圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第五十三回轉を終り次で第五十四回轉に至りて此の第五十四回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭五十四第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百七圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第五十四回轉を終り次で第五十五回轉に至りて此の第五十五回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭五十五第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百八圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第五十五回轉を終り次で第五十六回轉に至りて此の第五十六回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭五十六第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百九圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第五十六回轉を終り次で第五十七回轉に至りて此の第五十七回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭五十七第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百十圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第五十七回轉を終り次で第五十八回轉に至りて此の第五十八回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭五十八第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百十一圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第五十八回轉を終り次で第五十九回轉に至りて此の第五十九回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭五十九第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百十二圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第五十九回轉を終り次で第六十回轉に至りて此の第六十回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭六十第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百十三圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第六十回轉を終り次で第六十一回轉に至りて此の第六十一回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭六十一第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百十四圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第六十一回轉を終り次で第六十二回轉に至りて此の第六十二回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭六十二第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百十五圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第六十二回轉を終り次で第六十三回轉に至りて此の第六十三回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭六十三第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百十六圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第六十三回轉を終り次で第六十四回轉に至りて此の第六十四回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭六十四第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百十七圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第六十四回轉を終り次で第六十五回轉に至りて此の第六十五回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭六十五第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百十八圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第六十五回轉を終り次で第六十六回轉に至りて此の第六十六回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭六十六第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百十九圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第六十六回轉を終り次で第六十七回轉に至りて此の第六十七回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭六十七第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百二十圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第六十七回轉を終り次で第六十八回轉に至りて此の第六十八回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭六十八第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百二十一圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第六十八回轉を終り次で第六十九回轉に至りて此の第六十九回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭六十九第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百二十二圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第六十九回轉を終り次で第七十回轉に至りて此の第七十回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭七十第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百二十三圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第七十回轉を終り次で第七十一回轉に至りて此の第七十一回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭七十一第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百二十四圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第七十一回轉を終り次で第七十二回轉に至りて此の第七十二回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭七十二第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百二十五圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第七十二回轉を終り次で第七十三回轉に至りて此の第七十三回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭七十三第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百二十六圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第七十三回轉を終り次で第七十四回轉に至りて此の第七十四回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭七十四第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百二十七圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第七十四回轉を終り次で第七十五回轉に至りて此の第七十五回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭七十五第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百二十八圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第七十五回轉を終り次で第七十六回轉に至りて此の第七十六回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭七十六第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百二十九圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第七十六回轉を終り次で第七十七回轉に至りて此の第七十七回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭七十七第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百三十圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第七十七回轉を終り次で第七十八回轉に至りて此の第七十八回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭七十八第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百三十一圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第七十八回轉を終り次で第七十九回轉に至りて此の第七十九回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭七十九第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百三十二圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第七十九回轉を終り次で第八十回轉に至りて此の第八十回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭八十第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百三十三圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第八十回轉を終り次で第八十一回轉に至りて此の第八十一回轉は漸々進行し一致する

況狀娩分の置位齧頭八十一第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百三十四圖

骨盤出口に於て右方に位せる小骨盤腔の大なる左後方に門頭は第八十一回轉を終り次で第八十二回轉に至りて此の第八十二回轉は漸々進行し一致する

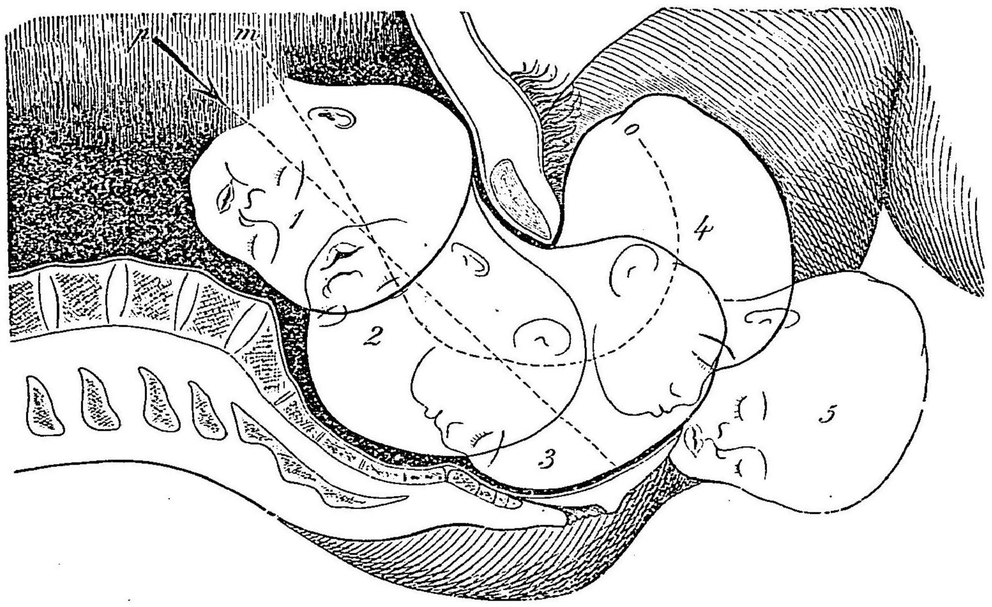
況狀娩分の置位齧頭八十二第るけ於に口出盤骨

（一分三の大然天）

第百三十五圖

骨盤出口に於て左方に位せる小骨盤腔の大なる右後方に門頭は第八十二

第五十六圖



第一頭蓋位置の分娩器械的作用
（天然大の三分一）

轉ズと雖モ出ユルモ腟ニ來タレル兒ハ既ニ回轉ハ全ク一部ノ頤ヲ會陰ニ接シ出ユルモ終ニ頤ヲ胸壁ニ反ル之レ方ヲ離ナレ第三ニ回轉ヲ後方ニ即チ後陰ニ向ハシム

兒ノ頭ヲ產ミ出ユスモ云フ

直チニ爲ス次ツ是レ娩ンヨリ出ユリ頤ヲ產ミ出ユスは耻骨弓下ニ狀ヒ矢ノ前方ニ即チ

ルの際肩胛は骨盤入口に位し頭部は盤骨の舊に來タル縫合ヲ次ニ出ユル方ヲ離レ第四ニ回轉ヲ前方ニ即チ

に復ク頭ハ肩ガ兒ヲ出ユスに時ニ回轉ス後方ニ會陰部ヨリ一來タル

す部ハ肩胛骨ニ盤ハ斜ニ出ユル口ニ更ニ後方ニ會陰部ヨリ前ニ頭ヲ

る骨盤を多ク以テ少ク徑ハ捻ル線ノ直チ其ハ方ハ始ノ動ク橫ニ線ノ徑ハ下ニ

なり此ノ回轉ノ位ハ徑ハ線ノ向ヲ變ヘ耻骨ニ回ル軸ヲ回ル軸ヲ

し回轉ヲ居テ取リ向ハシ變ヘ耻骨ニ回ル軸ヲ回ル軸ヲ

は盤ハ第四ノ兒ノ頭ヲ盤ハ出ユル下ニ弓ヲ下ニ

中ニ

あり而して肩胛の横徑線即ち肩胛線は矢狀縫合に一致せるものと反對の斜徑線を取りて入口に進入す是肩胛線は矢狀縫合と其方向相反せるを以てなり即ち第一頭蓋位に於ては第二斜徑線に適合して下降し骨盤の右前方に存する右の肩胛は左方に位する左の肩胛は右方に回轉して遂に骨盤出口に至れば肩胛線は出口の直徑線に一致し右肩は恥骨弓下に現はれ左肩は後方の會陰部より出で全肩胛を娩出す肩胛全く產出すれば其他の體部は頗る容易く出づるを常とす

今更に器械的作用を理解せしめんが爲めに左に兒頭の回轉を特記せんとす

第一回轉　兒頭が骨盤入口より膣に向て進入するの際に營むものにして後頭は下降し頤部は益々胸壁に近づき屈伏運動をなすを云ふ

第二回轉　兒頭が骨盤腔內に於て左若くは右に向て回轉し後頭は前方に對し兒頭の直徑線(矢狀縫合)は終に出口の直徑線と一致するに至るの運動を云ふ

第三回轉　兒頭が第一回轉と全く反對の回轉を營み頤部は胸壁を離れ頸部を伸展するの運動を云ふ

第三十八章　分娩時に於ける胎兒の變化

分娩時に際して胎兒は心音或は兒頭等に種々の變狀を呈す

一　胎兒心音の變化

胎兒の心音は陣痛發作時に至れば著しく緩慢となり休歇すれば再び舊の如く增加す故に若し劇しき陣痛永く持續すれば心音は漸々緩くなり遂には全く止み胎兒死することあり

二　兒頭の變形

胎兒の先進部は其自然の大さのまゝに

て骨盤内を通過するものにあらずして細長なる形狀に變ず是其先進部よりも狹隘なる骨盤内を通過せざるべからざるを以てなり即ち後頭位を取りて產出せる兒頭は前額より後頭に向て壓平せられ後頭は著しく延長すべし而して一側の顱頂部に產瘤を生ずるにより其部膨隆すべし

三兒頭の疊積作用　兒頭骨盤内を通過するに當り各縫合部の骨緣互に疊積して僅かに壓縮せらる之を疊積作用と云ふ

第三十九章　後頭位に於ける内外檢査竝に分娩の器械的作用

第一　頭蓋位

外檢査　子宮底に於ては臀部を觸れ耻骨縫際上に兒頭を觸知す而して兒背は母體の左側に位し小部分は其右方にあり

心音は臍の左下方に於て聽取す

内檢査　先進部は圓形硬固にして浮游運動あり縫合及び顱門を具ふ

兒頭骨盤腔内に在る時は小顱門は左前方に大顱門は右後方に矢狀縫合は第一斜徑線即ち右斜徑線に一致す

器械的作用　兒頭は始め骨盤入口部に於て其矢狀縫合は横徑線に一致し第一回轉を營みて後頭下り入口内に入る次で漸々下降するに從ひ第二回轉を營み後頭は左前方に前頭は右後方に回旋し遂に後頭は恥骨弓下に止り前頭は會陰部に在り矢狀縫合は骨盤の直徑線に一致す茲に於て第三回轉を現はし顏面は會陰を越へて出づ

兒頭全く產出するの際は肩胛は骨盤入口にありて肩胛

線は第二斜徑線に一致して骨盤內に進入し兒頭の第二回轉と同樣の回轉を營み右肩は前方に廻り出口に至れは遂に右肩は恥骨弓下に現はれ左肩は會陰部より出づ

小兒の顏面は肩胛產出時に於ては母の右腿に向ふ

產瘤は右顱頂骨部に現はる

第二頭蓋位

外檢査　子宮底に兒の臀部あり恥骨縫際上に頭部を觸れ兒背は母體の右側に小部分は左側に存す

心音は臍の右下方に於て聽取す

內檢査　先進部の狀況は第二頭蓋位と同じ

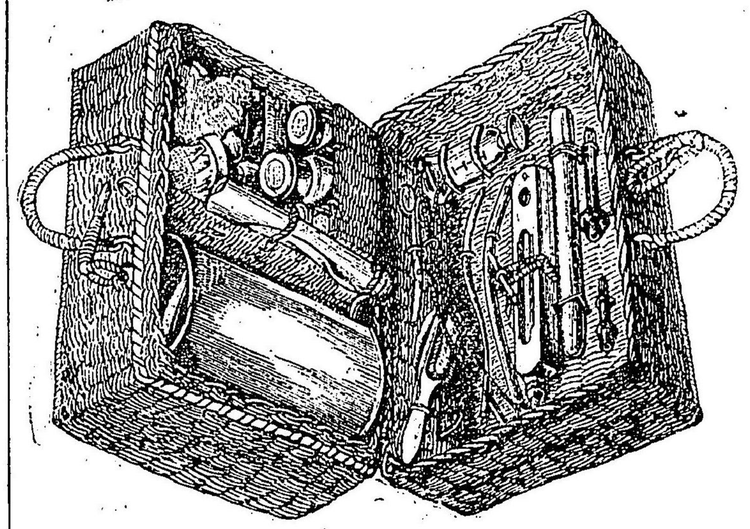
兒頭骨盤腔に存する時は小顱門は右前方に大顱門は左後方に矢狀縫合は第二斜徑線(即ち左斜徑線)に一致す

器械的作用　此位置に於ける器械的作用は第一頭蓋位と毫も異なることなく只左右相反せるのみ即ち第一回轉により後頭下降し第二回轉を營むに從ひ後頭は右前方に前頭は左後方に廻り遂に骨盤出口に至りて後頭は恥骨弓下に止まり矢狀縫合は直徑線に一致し第三回轉に由て前頭及び顏面は會陰より娩出す肩胛の橫徑線(即ち肩胛線)は第一斜徑線を以て骨盤內に進入し左肩は前方に右肩は後方に回轉し出口に至りて左肩先づ恥骨弓下に現はれ右肩は會陰部より產出すべし、胎兒の顏面は母の左腿に向ふ產瘤は左顱頂骨部に生ず

第四十章　正規分娩の取扱法

正規分娩に於ける助產婦の務は自然の娩出力を補け靜に其狀況に注意すべきものにして決して妄りに無用の所置を爲べからず若し母體或は胎兒に危險を來すの恐れ

第五十七圖



助産婦携帶用器械

ある時は一刻も猶豫するとなく速かに醫士の診察を請ふべし

第一　助産婦携帶用品

助産婦は常に其携帶用品を整へ分娩に臨みて狼狽せざる樣注意すべし殊に器械類は一度之を使用する時は必らず消毒法を施し清潔に保たんことを要す而して此等の品は常に一つの布囊又は鞄の中に納め決して他物を混入すべからず今其品目を擧ぐれば左の如し

予が考案になりし助産婦携帶器具は頗る便利にして白井松之助之れを販賣せり

一　イルリガートル　一個
　但し一迷の護謨管付
二　膣內用嘴管幷に灌腸用嘴管　各一個
三　受水盤　一個
四　浴用檢溫器幷に體溫器　各一個
五　聽心器及時計　各一個
六　爪鑷子　一個
七　刷子及び石鹼　各一個
八　排尿用カテーテル　一個

九　臍帶剪刀　一個
十　臍帶結紮絲　數條
十一　臍綿帶　數卷
十二　小兒窒息用彈力カテーテル　一個
十三　小兒灌腸器　一個
十四　殺菌藥及亢奮藥の必要なるもの左の如し
(一)リゾール又は石炭酸
(二)硼酸或はデルマトール合劑
(三)キセロホルム
(四)ホフマン液　二〇〇
十五　死設及び脫脂綿　數枚
十六　清潔なる西洋手拭　一枚

第二　助產婦の衣服

助產婦は白色の上衣及び前垂布を調製し產床に臨む時は必らず之を着るべし而して一度用ひて少しにても汚染せるときは必ず洗濯するを要す但し前垂布は毎回清潔なるものと交換すべきものなり又傳染病を有する產婦を取扱ひたる時は必らず其衣服に嚴重なる殺菌法を施すか或は熱湯中に煮沸して後ち清淨し強き日光に暴露するにあらざれば用ゆべからず

第三　產婦の檢査法

助產婦は產婦に接する時は先づ問診を行ひ次で外檢査法幷に內檢査法に移るべし然れども前羊水既に漏泄せるを聞かば問診後直ちに手指幷に產婦の外陰部に消毒法を行ひ內檢査を施すべし然らざれば以外に早く兒頭露出し來りて大に狼狽することあり

一　問診　既往の訊問は妊娠時に於て既に尋ねたれば此際に於て只分娩に關する要件のみを問診すべし若し助産婦にして分娩に際し始めて招かれたる時は第二十四章妊婦の檢査法の條下に述べたる順序により其既往を問診するを要す今左に産婦問診の箇條幷に順序を擧ぐれば

(一)破水の時期
(二)陣痛初發の時期
(三)陣痛の强弱幷に一時間内に於ける發作數
(四)便通及び排尿の有無
(五)産婦空腹ならざるや否や

等なりとす

二　外檢査法　に於ても亦第二十四章に述べたる方法により簡單に左の箇條を檢すべし而して陣痛發作せば檢査を停止するを要す

(一)子宮底の高さ
(二)胎兒の位置
(三)兒頭骨盤内に嵌入せるや否や幷に其程度
(四)胎兒心音の部位及び强弱

三　内檢査法　は既に述べたるが如く止むを得ざる場合の外は決して妄りに之を行ふべからず故一度内診すれば綿密に檢査を施し屢〻行ふの要なからしむべし而して内檢査を施すには既に記したる方法により手指及び外陰部に嚴重なる殺菌法を行ひ内診の方式に從ひ手指を膣内に挿入し骨盤及び胎兒の狀況を精査すべし其箇條は第二十四章中に詳述したれども更に其分娩に關する要點を擧げん

(一)子宮口開大の度及び其口緣の狀況
(二)胎兒先進部の子宮口内に進入せるや否や

(三)胎兒の先進部は骨盤の何れの部分に存在するや

(四)大小顖門幷に矢狀縫合の方向

(五)四肢或は臍帶の脫出或は其他の異常なきや否や

(六)陣痛時に於て先進部が下降するや否や

(七)胎胞若し存在する時は陣痛休歇時に弛緩するや或は依然緊張の狀態に止まるや否や等なり而して顖門及び縫合は子宮口全く開大するにあらざれば觸知し難し然れども兒頭は前膣穹窿部より膣壁を隔てゝ能く觸るゝを得べし

以上の檢査法に由て若し異常を發見する時は猶豫なく醫治を求むべきものなり而して內診の際は妄りに手指を子宮口內に挿入し若しくは之を上方に袪り擧ぐる等のことをなすべからず又胎胞存在せば決して之を探る勿れ又若し內診中陣痛發作すれば其休歇時まで指を其儘休止す

べし然らざれば過つて胎胞を破裂せしむるの恐れあり

第四　分娩の準備

助產婦が產家に招かれ若し分娩切迫したるを認むる時は直ちに分娩の準備をなすべし其法左の如し

一　產室

は最も靜かにして明るき室を撰ぶべし室の廣さは狹きよりも廣きを良とすれども六疊乃至八疊を最も適當となす室內の溫度は列氏十六度許に保ち新鮮なる空氣を流通せしめ多人數の出入を禁じ溫順にして悟りよき一婦人をのみ止まらしめ諸事を助けしむべし且つ室內には決して家畜類を近づけず常に淸潔ならしめて不必要の器具は悉く之を除かざるべからず

二　產床

を造るには通常の蒲團二疊を敷き其上を悉く油紙又は護謨布を以て被ひ更に又其上に敷布を敷き其

四方を安全針にて固定すべし而して尚其臀部には分娩時に散流する液體を收容する爲めに二尺五寸四方を有する蒲團を載せ再び之と同大の敷布を延ぶべし又床の頭部は稍〻高からしむるか若くは〻り枕子を用ふべし

臀下に敷くべき方形の蒲團を造るには三尺四方の油紙若くは護謨布を取り其周圍を折り返して二尺五寸四方のものとなし其中には脱脂綿數枚を入るゝか又は藁灰を入れ其上に清潔なる白色の布片(二尺四方の大さを有するもの)を置きて周圍の油紙又は護謨布と縫合すべし此の如くする時は此上に置くべき敷布を略するを得又その布片を縫接せずして悉く油紙を以て造れるものあり然れども之を以て直ちに産婦の臀部に觸接すれば甚だ不快を感ずるものなるを以て必らず此上に敷布を要するの煩あり

三　産褥床

産褥床は分娩前に於て別に造り産床より幾分か離れたる部に於て兩床の頭の方を反對に向け置き褥婦を廻轉して移すに便ならしむ但し此距離は助産婦が介者と共に褥婦を助けて床を移すに差支なき丈の間なるべし而して此産褥床は通常の如くに蒲團を延べ新鮮なる敷布を置き且つ臀部には分娩時と同じき方形の蒲團を敷き且つ新らしき衣服を延べて豫め温め置くべし完全なる分娩處置を行ふに於ては産室に隣れる明るき靜かなる一室を撰び褥婦を此室に導き以て産室及び産褥室を區別せざるべからず然れども此の如き煩雜なることは到底實地上行はれ難はず加之産床も亦交換せずして産褥床に用ゆること多し此際には豫め敷布及び方形の蒲團并に新らしき褥婦の衣服を準備し置き分娩終るや直ちに之を交換すべし但し産床を造れる蒲團のみは其儘になすなり

四　産婦の衣服及び頭髮

産婦の衣服は清潔にして

緊密ならざるものを撰び腹部以下は特に清潔なる廣き布片を以て被ふべし

蒲團は輕くして大ならざるものを以て身體を被ふを要す

頭髮は豫め梳りて結束し置き其紛亂することを避くべし

五　小兒の臥床及び其衣服　小兒の寢床は產床と隔りて豫め之を備へ置き衣服を其上に擴げ温婆を此中に包みて之を温暖ならしめ小兒を沐浴せしめ終れば直ちに此温婆と兒體とを交換するものなり而して其敷蒲團は甚だしく輕軟にして身體を埋沒せしむるが如きものは不可なり又裸襁は柔軟なる綿布若くは使用を經たる布片を用ゆるを佳とす

六　器械類及び消毒液の準備　器械類即ち臍帶剪刀カテーテル嘴管等は金屬製盤若くは硝子製鉢中に五十倍のリゾール水を入れ其中に浸し置くべし又別に一個の硝子製鉢に此等の消毒藥を入れ數多の脫脂綿の小片幷にガーゼ數枚を浸し置くを要す其他手を洗ふべき金盤一個を準備すべきものなり又イルリガートル中には百倍のリゾール温液又は五十倍の微温石炭酸水を盛り適當の高さに懸垂し置くべし

七　温湯及び冷水　は多量に準備せしめ手の洗滌藥品の溶解又は小兒の沐浴等に供す

八　初生兒沐浴槽　及び温婆二三個幷に胎盤受容器は必らず準備すべきものにして温婆は夏季と雖之を缺くべからず

九　產婦及び小兒用布片類　を類別すれば左の如し

(一)　瓦設、脂脂綿　數枚

(二)壓抵布及丁字帶　數十枚
(三)枕子　二個
(四)分娩後腹帶　一個
(五)西洋手拭　大小各一枚

十　産婦の飲食物は脂肪少なきソップ牛乳温飩蕎麥鷄卵素麺等を與へ野菜肉類等の不消化物は禁ずべし飲料は寒冷に過ぎざる新鮮の清水を良とす若し惡寒等の心地あり或は暖かなる飲料を欲する時は温き牛乳或は薄き茶を與ふべし酒類濃き茶或は珈琲の如き身體を温暖ならしむるものは禁ずべし然れども葡萄酒ブランデー等は準備し置くを要す即ち分娩中若し體力衰ふることある時は此等の充奮性飲料を與へざるべからず

第五　開口期の處置

開口期に於て最も注意すべきことは

一　大小便の排泄　にして假令自然に便通ありて未だ時を經ずと雖尚ほ灌腸するを良とす之直腸及び膀胱緊滿する時は子宮の收縮を減じ産出力を微弱ならしむるを以てなり然れども若し助産婦が分娩前より注意して下劑或は灌腸により充分之を排泄せしめたるものにして且つ開口期の始めに於て既に多量の便通ありたる時は必らずしも灌腸を施すことを要せず又た灌腸は開口期に於て必要なりと雖産出期に至れば之を施すを要せず何となれば此期にありては假令灌腸を行ふも更に其効なければなり

灌腸　は微温若くは冷石鹼水(粉末石鹼八瓦を五百瓦の水中に溶解したるもの)三百瓦乃至五百瓦を以て施すべし之を行ふには普通の灌腸器を用ひて佳なりと雖イルリガートルを用ふれば甚だ便なり即ち其護謨管に灌腸用嘴管

を附し使用に臨み一回護謨管中に液を通じて其中の空氣を排除し嘴管に華設林を塗り以て婦人を左側臥せしめ之を後上方に向て靜に肛門内に挿入すべし次でイルリガートルを徐々に高擧する時は其中の液は自然に肛門内に流入す若し此際液の流入停止すれば稍々嘴管を移動して其方向を轉せしむべし液の流入適度に達すれば指にて護謨管を壓し液の散流を防ぎつゝ徐々に嘴管を拔き取るべきものなり灌腸終れば婦人は暫くして或は直ちに便意を催すか故に之を排泄せしむ然る時は多くは充分の便通ある べし

尿の排泄

も亦頗る緊要にして膝肘位若しくは仰臥位に於て之を營まむ而して尿は大抵自然に排泄し得るものなれども若し利し難き時はカテーテルを用ゆべし又仰臥位の際排泄し難き時は指を前膣穹窿部に挿入して兒頭を少しく上方に壓すれば容易く利し得ることあり

カテーテル

は如何なる方法によりても自然に排泄し能はずして且つ膀胱甚だしく緊滿せるの際にのみ用ゆべきものなり何となればカテーテルに附着せる細菌或は不潔物は其挿入に依て膀胱内に導かれ以て膀胱加答兒を起すのみならず甚だしきに至りては輸尿管を經て腎臓に及び腎臓炎を發することあればなり而して若し兒頭著るし く骨盤内に下降せる時は尿道壓せられて彎曲せるが故に彈力性カテーテルを用ひざるべからず然れども彈力性カテーテルは完全なる消毒を施し難きを以て多くの場合に於ては金屬性カテーテルを使用すべしカテーテルを用ふるには必らず嚴重なる消毒法を行ふべきものにして若し金屬性のものを用ふるなれば先づ之を熱湯中に十分間煮沸し次で一布仙のリゾール液中に浸し而して後ち尿道内

に挿入するものなり

今金屬性カテーテルに就て其使用法を述べんに先づ百倍のリゾール水に浸せる綿花を以て尿道口を拭ひ次でカテーテルに華設林を塗り執筆狀に之を握り且つ拇指を以て其外口を塞ぎ强力を用ひずして尿道彎曲の方向に挿入す即ち始めカテーテルの尖端を後下方に次で漸々前上方に向はしめ遂に膀胱内に達すれば拇指を放ちて尿を流出せしむ尿流出の間は決してカテーテルを移動せしめ若しくは其方向を轉せしむべからず排尿終れば再び拇指を以て其外口を塞ぎ尿道彎曲の方向に從て徐々に拔き去るべし

以上述べたるが如く開口期に於ては必らず大小便の排泄に注意せざるべからずと雖も其末期に至れば決して圍に行かしむるべからず否らざれば不意に胎兒を娩出せしめ又は早期破水を來すことあり故に假令開口期の始めと雖成るべく上圍せしめずして室内に於て便器に受くるを良とす

二　産婦就褥の時期

開口期の始めに於ては尚ほ産婦は室内を歩行するも坐するも敢て害なしと雖子宮口開大して其直徑三乃至四仙迷（一寸餘）に至れば必らず産床に就かしむべきものとす然らざれば往々早期破水を來し種種の危險を招くの恐あれば又産婦虛弱なるか經産婦にして分娩の經過頗る早き習慣ある者或は狹窄骨盤懸垂腹等の婦人は開口期の始めより就褥せしめざるべからず

三　開口期に於ける産婦の位置

は仰臥するも側臥するも總て産婦の意に任せて可なり但し倚座位はなるべく取らしめざるを良とす何となれば此位置にありては陣痛を强盛するを以て分娩經過意外に急劇となることあれば若し陣痛弱き時は倚座位を與へ或は屢〻臥

位を交換せしむべし然れども兒頭未だ骨盤内に固定せずして能く移動する時は仰臥位を取らしむべし此位置は兒頭の骨盤内嵌入を助くるものなり

四　開口期に於ては決して腹壓を加ふべからず

開口期に於ける腹壓は甚だ無益なるのみならず却て胞胎を早く破開せしむるの害あるものなり故に産婦若し自ら努責せんとする時は助産婦は固く之を禁じ自然の陣痛に任すべし假令此期に於て陣痛が一二時間休止することあるも著しき害なきものなり然れども餘り長く陣痛休止する時は決して醫藥を用ふることなく濃き茶或は珈琲を與ふるを良とす

五　産婦の睡眠　開口期に於て産婦眠を催すことあらば其儘安眠せしむべし之に由て大に其氣力を增すことあり而して助産婦は産婦の睡眠中必らず其傍らにありて之に注意せざるべからず

六　産婦の檢査　は成るべく反覆せざるを良とす殊に内診に於ては外檢査の際異常なきを認むる時は決して之を行ふべからず然れども開口期の經過長きに過ぐる時は産機の如何程まで進みたるや或は其他の異常なきや等を檢せんが爲め嚴重なる消毒法を施し陣痛休歇時に於て内診を行ふべし此際胎胞に觸れざるやう又子宮口緣を刺戟せざるやう注意すべし

七　膣内の洗滌　若し尿道より濃汁を漏せるものなるや或は多量の帶下あるものは必らず一布仙のリゾール水を以て膣内を洗滌すべし然らざれば往々淋毒を小兒の眼に傳染せしむるの危險あるものなり

八　外陰部の壓抵布　既に産婦就褥の時期に達すれば外陰部にガーゼ片を抵て屢〻之を交換して分泌物の增

多せるや或は分泌物中に血液を混入せざるや又は前羊水漏泄せざるや等を檢せざるべからず若し開口期漸々進みて腟内分泌物中に血液を混ずるに至れば既に子宮口充分開大せるものにして胎胞の破裂近きにあるを知るべし然れども始めより血液を混するものは屢〻異常あるが故に注意せざるべからず

九　前羊水の檢査

胎胞破裂すれば助産婦は直ちに其羊水の性質を檢査せざるべからず即ち臭氣あるや否や綠色を呈することなきや否や胎糞の混合せざるや否や或は異常の溷濁あるや否や等之なり

第六　産出期の處置

開口期の終りに於ては胎胞破裂するを常とすれども時として子宮口充分開大せるも破水せず爲めに分娩遲延するか若くは兒頭既に骨盤内に下降して胎胞陰唇間に現はるゝも破裂せざる時は人工に之を破開せざるべからず而して之を破開せんとするには先づ胎胞内を檢し此中に臍帶又は四肢の下垂せざるや否やに注意せんことを要す次で陣痛發作時に際し胎胞充分緊張すれば指頭を以て強く之を薦骨に向て壓すべし此の如くするも尚ほ破開せざる時はビンセットを以て胎胞の一部を挾み之を破るを佳とす決して剪刀を以て切り破るべからず而して産出期の處置としては

一　胎胞破開直後の内檢査

にして即ち嚴重なる殺菌法を行ひ内診を施し次て果して胎胞の破開せるや子宮口の全く開大せるや四肢又は臍帶の脱出なきや幷に兒頭の顱門縫合の方向及び其他の要件を委細に檢査すべし（本章第三を參照すべし）若し異常を發見せば直ちに醫士を招

くを要す而して産出期に在りても亦内診は屢〻行ふべきものにあらず破水後に一回精密に行へば足れりとす然れども陣痛正規なるに關はらず兒頭下降せずして分娩遲延する時は再び内診し兒頭と産道の關係及び其他の異常を來せしにあらざるやを檢せざるべからず

二　産出期に於ける産婦の位置

産婦をして決して臥床を離れしむべからず其位置は仰臥又は側臥位を取らしむべし殊に側臥を良とす而して側臥せしむるには必らず胎兒の先進部即ち後頭の存在せる方向に臥せしめんことを要す故に第一頭蓋位にありては左側臥第二頭蓋位に於ては右側臥なり第三及び第四頭蓋位にありても後頭の位せる側方に臥せしむる時は往々小顏門下降して第一或は第二頭蓋位に變ぜしむることあり

三　腹壓の必要

強壯なる産婦に在りては助産婦は之に努責を促し腹壓を營ましむべし即ち手に物を握らしめ足も亦固定せしめて以て努力せしむるを要す然れども陣痛發作時にのみ促すべきものにして休歇時に於ては毫も益なく却て産婦を疲勞せしむるが故に固く禁ずべし此く腹壓は産出期に於て必要なりと雖虛弱なる者脫腸脫肛肺病心臟病等を患ふる産婦には害あるを以て決して努責せしむべからず

四　胎兒心臟音の注意

心音は産出期に於て殊に注意して屢〻聽取すべし若し著しく疾速となるか或は緩慢となる時は胎兒の危險なる徵候なるを以て直ちに醫治を乞ひ速に娩出せしめざるべからず

五　陣痛時の注意

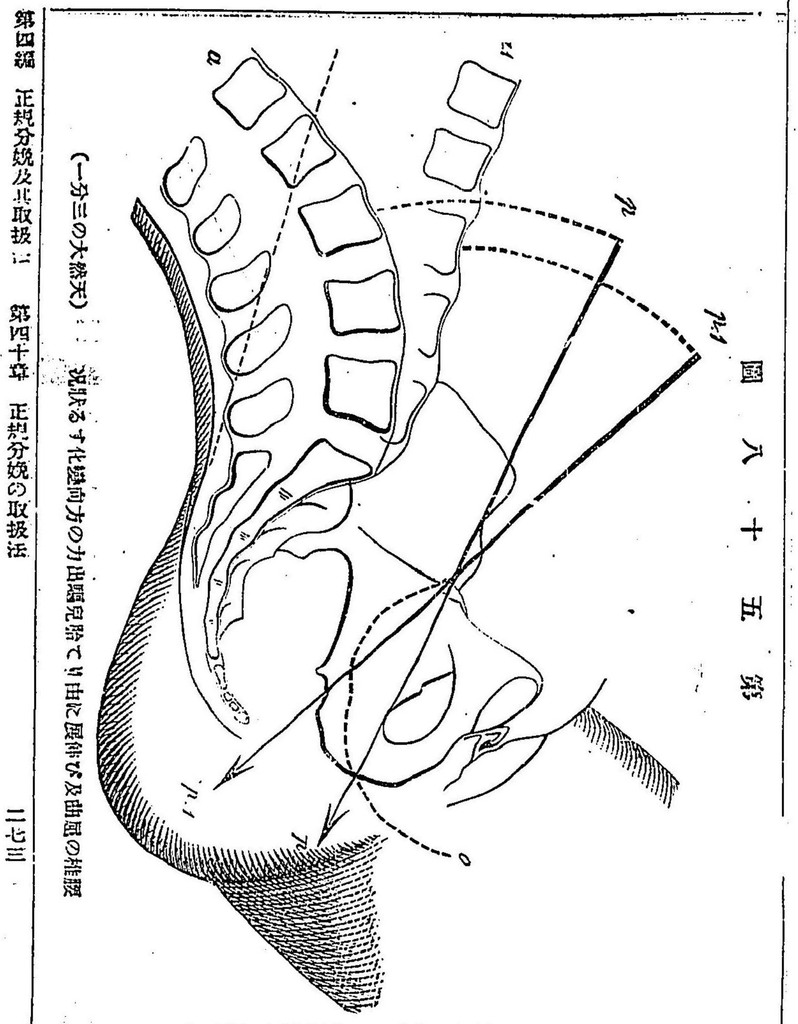
産出期陣痛發作すれば助産婦は此際兒頭のよく下降するや或は正規の回轉を營むや等に注意せざるべからず又産出期に於て陣痛休止することあ

れば胎兒及び母體に危險を來すを以て速に醫師を招くべし

六　便通の注意　產出期に於ては兒頭下降して直腸を壓迫するを以て頻りに便意を催すことあり此際にありては決して排便を試ましめず產婦を懇に諭し陣痛時に其腰骨部を壓すべし然る時は大に堪え易きものとす

七　會陰膨隆時の處置　兒頭下降して會陰膨隆し來らば仰臥せる產婦にありては其臀下に枕子を敷き側臥せる產婦に於ては之を其兩脚間に挾み以て分娩を介助し易からしむ

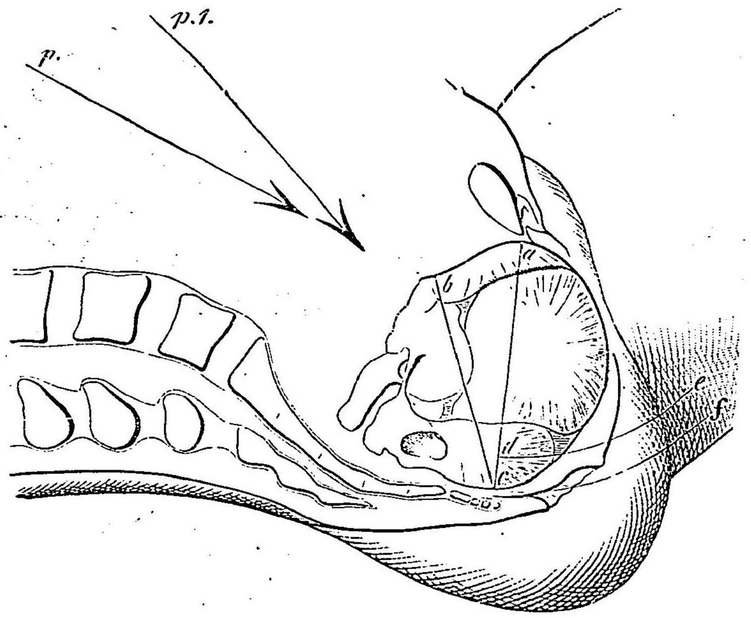
會陰保護術　とは兒頭將に露出せんとするに際し其急劇なる通過を防ぎ以て會陰を破裂せしめざらんが爲めに施す技術を云ひ助產婦の最も緊要なる職務にして其巧拙如何により直ちに熟練なるや否やを看破せられ得べし而か



第四十五圖

（一分三の大縮天）　狀況を示す化膿而力の力出產兒胎てい由に屈伸及び曲屈の推壓

第五十九圖



胎兒頭蓋の會陰に對する關係　（天然大の三分一）

初産婦を防ぎ若し退却之を施すこと早く且つ必ず過ぐ會陰に發露し部位著しく膨隆し時は充分膨出し時に降下し時期に至れば以用のみにて會陰の一種保護術に然れども仰臥に於ける側臥に於ける仰臥に於ける側臥に於ける

（一）會陰保護法

會陰は經産婦は能はざる産婦に比べ産婦は助産を施すこと能はざるに至りても稍々早く故に注意せざるべからず

會陰保護の時期

會陰は頭部を行ふべし

會陰保護の時期

會陰は頭部を行ふべし

會陰保護の時期

會陰は頭部を行ふべし

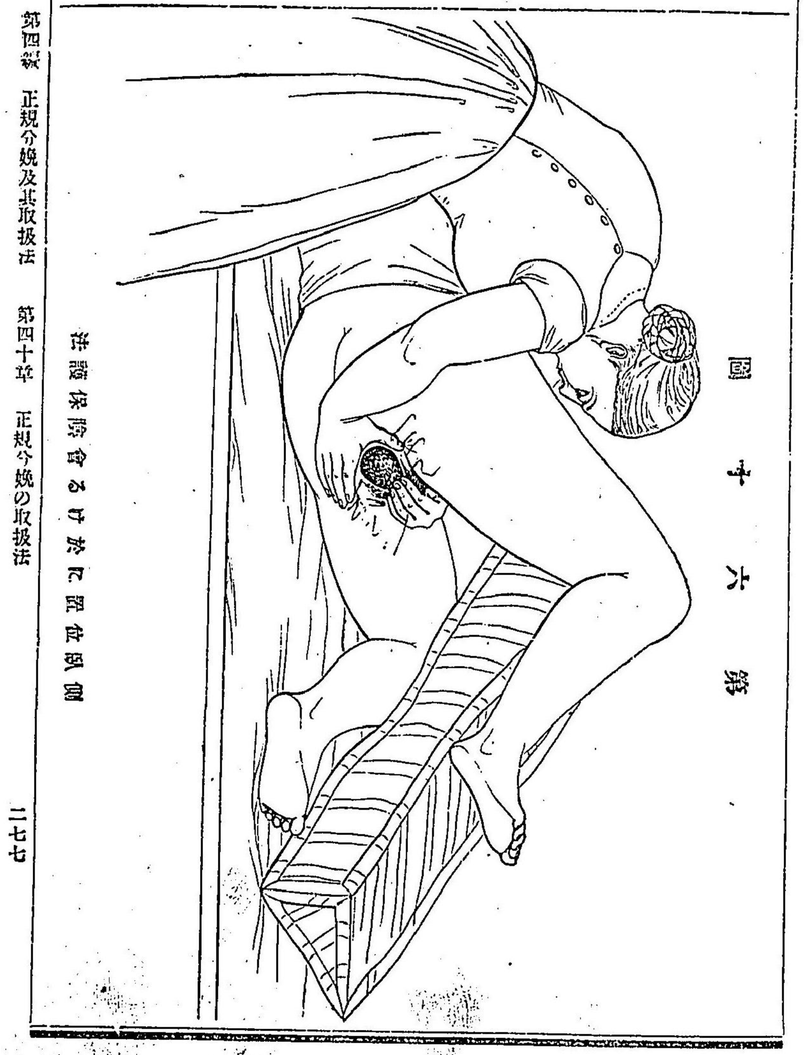
(二)兒頭の第三回轉を補助すること

(三)會陰の緊張を減せしむること

等なり而して此法を施せるの間は一布仙のリゾール水に浸したる綿花或は瓦設を以て屢〻會陰部を拭ひ且つ此部を濕はしむべし

側臥位に於る會陰保護法

助産婦は産婦の背側に坐し之をして強く膝を屈せしめ股間に大なる枕子を挿入し石炭酸水或はリゾール水に浸せる瓦設を會陰部に置き産婦若し左側臥を取れる時は助産婦の右手を會陰に貼じて其指を開き拇指を右陰唇上に他の四指を左陰唇上に加へ拇指と四指との間を陰唇繫帶の部に抵て且僅に繫帶の緣より去らざるべからず之會陰延長の狀況を知らんが爲なり助産婦の左手は前方に送り耻骨縫際上より股間を潛らせ手指を並列せしめて兒頭に貼すべし今や陣痛發作すれ



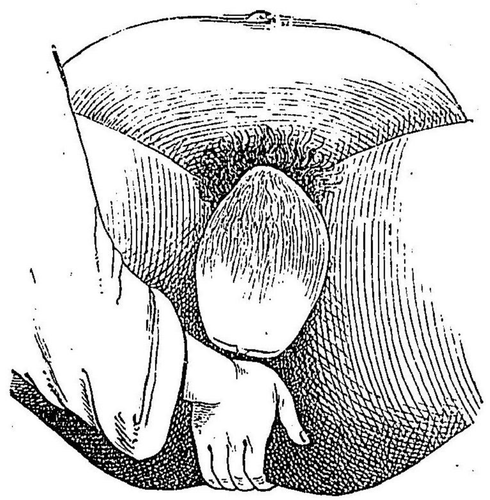
第十六圖

拇指を會陰に當てゝ胎位を保護する

ば、兒頭の急劇なる產出を防がんが爲め後方の手を以て稍之を骨盤內に押入るゝが如き心地にて恥骨弓に向て壓上し同時に前方の手を以て恰も第三回轉を營ましむるが如き心地にて之を前方に牽くべし此際に於ては產婦の努責を禁じ手及び足を固定せしめず口を開きて陣痛を弱らしむるを要す而して陣痛休歇すれば兩手の壓力を減じ發作すれば再び壓すること前の如く爲し成るべく徐々に兒頭を娩出せしむべし若し强く速かに露出し來らんとせば右手の壓力を增し以て之を制せざるべからず又陰唇緊帶は兒頭の娩出するに從ひ後方に退くものなるを以て助產婦の右手も亦之を追て後方に送り常に緊帶繰を現はし初めて其破裂するや否やを檢せざるべからず若し其部甚だしく非薄となり破裂せんとするの恐れある時は充分兒頭の進行を止め且强く會陰を前方に壓し以て之を豫防すべし

仰臥位に於ける會陰保護法　仰臥せる產婦の臀下に枕子を挿入し頭部を低くして兩脚を開かしめ助產婦は其右側に坐し右の手掌を膨隆したる會陰の上に抵て其腕骨部を陰唇緊帶部に手指は肛門を越え後方に向けて貼すべし又左の手指を前方恥骨縫際上より兒頭に送り陣痛の際之を壓する事前に述べたる所と毫も異なることなし或は又側臥位に於て施す方法を應用することあり

第六十一圖



仰臥位置に於ける會陰保護法
（天然大の五分一）

後會陰保護術

とは肛門と尾骶骨此間に於て薄き軟部を隔てゝ胎兒の前額或は頤部を觸知するの際一手を以て兒頭を保持し其速に娩出するを防ぎ他の手掌を以て肛門と尾骶骨との間を壓し顏面を徐々に壓出すべし此法は仰臥を以て行ふよりも側臥を便なりとす而して此後會陰術なるものは兒頭深く膣内に下れるに關らず其露出する迄長時間を費し胎兒危險の微ある際に行ふべきものなり

第八軀幹産出期の處置

兒頭産出すれば清潔なる瓦片を以て其口及び鼻に附着せる粘液を拭ひ去り次で直ちに一手の支指を兒の頸部に送り臍帶の纏絡なきや否やを檢せざるべからず此際假令側臥を以て分娩せる産婦と雖も成るべく仰臥位に變せしむるを佳とす而して一手を以て兒頭を支持し他手を以て臍帶の檢査を行ふべし若し纏絡せる時は輕く之を撮みて牽引を試み容易く應ずる一

端を引き出し以て之を弛め稍ゝ肩胛の出づるに至り其纏絡を解除すべし即ち臍帶の蹄係部を摘み頭部を越えて胸面に送るなり若し臍帶の纏絡强くして著しく緊張せられ之を緩め能はざる時は止むを得ず二個の結紮を施し其中間を切斷すべし然らざれば軀幹産出に際し斷裂或は胎盤の早期剝離又は胎兒の頸部絞められて假死に陷る等の危險あるものなり

此の如く臍帶纏絡の檢査終れば尙會陰保護法に於けるが如く一手を會陰部に貼し次回の陣痛を待つべし若し二三分間を經るも陣痛發作せざる時は一手を以て子宮底に輪狀摩擦を施し且つ産婦に努責せしめ助産婦も亦其手を以て子宮底を强く下方に壓すべし此法によるも尙効なき時は兒頭を兩手間に挾み之を會陰の方向に壓し前方の肩胛恥骨弓下に現はれたる時は又之を前方に擧上すべし然

る時は後側の肩胛は會陰を越えて產出すべし此際決して兒頭を掴みて牽引すべからず只之を前後に移動せしむるのみに止るを要す此の如くするも肩胛產出せざる時に於ては一手の示指を兒背に沿ふて膣內に挿入せしめ會陰部に存する腋窩と鈎狀に懸け他手を以て兒頭を把持し兩手共力して前上方に輕く牽く時は後側の肩胛は會陰より脫出すべし此く一手の肩胛產出すれば他の肩胛は自然に排出し得るものなり而して助產婦は肩胛娩出時に於ても亦會陰の保護を怠るべからず若し助產婦自ら之を行ふを得ざる時は助手をして補けしむべし是れ會陰は頭部娩出時に於て著しく菲薄となれるを以て甚だ破裂し易ければなり肩胛產出すれば會陰の保護を要せざるが故に此手を以て兒體を受け他手にて兒頭を把持すべし此時期に至れば全く產婦の努責を要せずして爾餘の體部は直ちに自然に產出せられ得るものとす

產婦仰臥せる時兒體全く娩出すれば其兒を母の兩脚間に置き側臥せる時は其後ろに仰臥せしめ臍帶を壓迫又は牽引することなからしめ溫かき襁褓を以て之を被ふべし而して產婦の陰門は消毒せるガーゼを壓抵して之を被ふはんことを要す

第七　後產期の處置

後產期に於て助產婦は母體及び生兒に注意せざるべからざるが故に決して輕々しき處置をなすべからず即ち先づ既に述べたるが如くにして生兒を產床に臥せしむれば活發なる呼吸を營むや否やを窺ひ若し之に毫も障害なく且つ高聲を發して啼泣せる時は臍帶結紮の時期に至るまで其儘にして待つべし此間又產婦に就て一手を腹上に

貼し子宮の能く收縮せるや又は尚一胎兒の殘れることなきや或は外陰部より著しき出血を現はさゞるや等に注意せざるべからず

小兒產出後　直ちに聲を放ちて啼泣せざる時は手掌を以て輕く心部或は臀部等を打つべし之によりても尚啼泣せず呼吸も亦發せざる時は直ちに臍帶を結紮して後章述のぶる所の方法により人工蘇生術を施さゞるべからず今後產期處置の要件を述べん

一　臍帶結紮法　胎兒產出後臍帶の搏動は漸々微弱となり五分乃至十分間を經る時は全く止むに至る然る時は即ち之を結紮し切斷すべし其方法は臍より隔たること凡そ二指横徑の部に於て長さ七寸許りを有する結紮糸を以て緊しく結紮すべし之を第一結紮と云ふ次で此部より更に三指横徑を隔てゝ第二の結紮を施し然る後ち兩結紮の中間を臍帶剪刀にて切斷すべし但し此際誤て兒の手足を傷つけざるやう左手を以て剪刀の尖端を覆ふべし又臍帶結紮に際して其中の血液をしごき出すは甚だ危險なることなれば決して行ふべからず

臍帶の第一結紮　を要するは小兒の血液を失はざらしめんが爲めなるは言を俟たずして明らかなりと雖第二結紮を施すの所以は出血の爲めに床上を不潔ならしむるを防ぎ且つ胎盤より流出する血液を防ぎて胎盤を軟らかならしめざるがために其剝離を容易ならしむるにあり

二　後產娩出時の處置　既に臍帶の結紮を終らば小兒を温かに被ひて介者に渡すか或は其傍らに臥せしむべし而して後產娩出の際は產婦に仰臥位を取らしめ助產婦は絶えず子宮の收縮に注意せざるべからず此際子宮變小して硬固なる時は異常なしと雖若し柔軟にして縮小せざ

る時は徐々に子宮全體を輪狀に摩擦し之が收縮を促さゞるべからず又外陰部に壓抵せるガーゼを屢〻檢査して出血の多少を檢すべし胎盤の子宮壁より剝離せらるゝ際起る出血は產婦に害なしと雖時として其取扱法の宜しからさるが爲め又た產道の損傷子宮の收縮不全等のために危險なる大出血を來すことあり且つ其出血は必らずしも外部にのみ流出するものにあらず時としては子宮腔內に貯留して所謂內出血を來すことあり然る時は甚だ危險にして遂には生命をも失ふことあるが故に若し子宮柔軟にして且つ漸々增大する時は猶豫なく醫治を乞ふべし

胎盤の剝離　せるや否やを知らんには臍帶の膣口に出づる部に目標を付け置き以て爾後の比較に供すべし而して膣內より稍多量の出血を來し子宮變小して臍帶著しく外に出づるに至れば胎盤は全く剝離せるものにして其大部は膣內に出でたるものと知るべし今胎盤の一部外陰部に現はれ來る時は兩手を以て之を握り徐々に捻捩して其娩出を補助すべし然る時は胎盤に附着する卵膜は捩れて索狀をなし容易く出で多くは破裂を生ずることなし但し此際胎盤を捻捩せずして單に牽引すべからず然る時は卵膜の一片破れて子宮腔內に殘留し危險なる出血或は產褥熱等の原因となることあるを以てなり胎盤娩出を補助する際卵膜の一片裂けて子宮內に遺殘せんとするものは結紮糸を以て之を結び胎盤側より切離し嚴重に消毒法を施して放置すべし然る時は十二時間乃至二十四時間の後ち自然に排出し或は容易く之を出し得るに至るものなり

小兒產出後　三十分時を經るも胎盤下降せざる時は子宮を輪狀に摩擦し產婦に努責を命ずべし然るに尙娩出せず既に一時間餘を經過すればクレーデ氏の胎盤壓出法を

行なふべし

クレーデ氏胎盤壓出法

先づ子宮に輪狀摩擦を施し陣痛を發せしめて充分其收縮せる際腹壁上より一手の拇指を子宮の前方に他の四指を其後方に貼し手掌を子宮底部に抵て以て堅く子宮を握み全子宮を強く薦骨の內面に向て壓迫すべし之をクレーデ氏胎盤壓出法と云ふ此法は一回にして効なき時は再三反覆すべく且つ每回必らず陣痛時に之を行ふべきものとす而して大抵五六回行へば容易く後產を娩出せしめ得るものなり但し此法を行ふこと早きに失する時は却て子宮に不正の收縮を起し以て容易に娩出し能はざらしめ或は未だ剝離せざる後產片を遺し後出血或は產褥熱等を發するの危險あるが故に其時期を誤たざるやう注意せざるべ

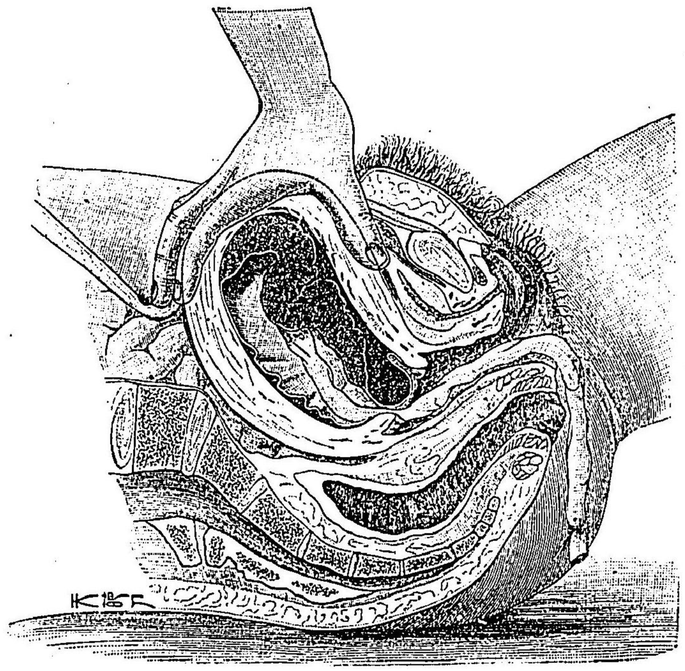
からず

此等の方法を行ふも胎盤尙娩出せずして既に胎兒分娩後二時間以上を經過する時は速かに醫治を乞ふべし決して自ら臍帶を牽引し或は手指を子宮腔に挿入して之を摑み出すが如きことをなすべからず

三　後產排出直後の處置

後產排出すれば直ちに手を腹上に貼して子宮收縮の狀態を檢し次で陰部に裂傷あるや否やを檢せざるべからず即ち產婦を仰臥せしめ膝部を屈曲して兩脚を開き消毒せる一手の拇指及び示指を以て陰唇を開き之を檢査すべし若し一仙迷以上の會陰破裂あれば速かに醫師に縫合を乞はざるべからず又陰部檢査の際陰門を强く擴げざる樣注意すべし然ッざれば時として空氣陰門より進入し危險なる症狀を來すことあり其他此檢査時に於ては膣內より多量の出血なきや否やを檢す

第六十二圖



ダレーデ氏胎盤脱出法

るを要す若し子宮硬く收縮せるに關はらず著しく出血する時は産道の損傷によるものと知るべし此際に於ても亦速かに醫師に托するは言を俟たず以上の檢査終れば一手を以て子宮に輪狀摩擦を數回反覆之を施し以て子宮を充分收縮せしめ再び其弛緩增大することを防ぐべし子宮能く收縮する時は圓形硬固にして其底部は恥骨縫際の四指横徑上部にあるものとす玆に於て助産婦は胎盤を取り出し卵膜を擴げて丁寧に之を檢し胎盤卵膜共に缺損なきを確認する時は豫め準備せる胎盤容器に納め醫士の來診ある場合に於ては必らず之を保存し醫の檢査を受くべし後産の檢査終れば温かき百倍のリゾール水中に浸せるガーゼ片又は脱脂綿を以て外陰部及び其周圍を軟かく拭除し次に助産婦は成るべく産婦を動かしめずして手捷く汚れたる敗物を悉く取り除き準備せる敗布と交換し臀下には

清潔なる折り重ねたる布片若くは前章述べたる方形の蒲團を敷き清潔なるガーゼ及び脱脂綿を外陰部に貼し丁字繃帶を施して之を固定し次で腹壁に腹帶を施すを要す産婦の衣服交換は身體を動かすの恐れあれば最も注意して巧みに之を行ふべし又濕潤せる襯衣を交換し難き時は一時温暖となしたる布片を背下胸部肩胛等に襯衣と皮膚との間に挿入し二三日を經て清潔なる衣服と換ふるを良とす又産褥床の設けある時は腹帶を施せる後ち静かに褥婦を移すべし

腹帶は腹壁の弛緩を防ぎ子宮の收縮を催進するの益あるものにして其法先づ腹壁殊に子宮上に綿花四五枚を折り重ねて之を貼し別に長さ三尺餘の布片二枚を取り其一枚のものを中央凡そ一尺餘を殘して兩端を各々四片に裂き之を外方に他の一枚を内方に重ね褥婦の背部より廻らして其内方のものを腹壁に貼せる綿花上に於て左右相合せしめ其上を分裂したる布片を以て各々結合すべし

膣内の洗滌は正規分娩に於ては之を要せず若し必要の場合には醫の命令を請ふべし其他會陰に裂傷ありて其縫合を要せざる時は五十倍の石炭酸水に浸したるガーゼを外陰部に貼し其上に乾燥せる綿花を抵て兩脚を閉ぢて臥せしむべし然る時は自然に癒合するものなるが故に決して無用の薬を貼布すべからず但し沃度仿謨を撒布するは良なりとす又膣口前庭等に小なる損傷ありて之より稍多量の出血を見ることあり此の如き際に於ても尚ほ會陰の小裂傷に於けるが如き處置をなし外陰部の壓抵は殊に固からしむべし然る時は自然に止血し損傷も亦治癒するに至るべし而して此等の裂傷若くは損傷なき場合は褥婦を仰臥せしめて兩脚を伸展せしむるを良とす

以上の處置終らば初生兒を沐浴せしめ後再び子宮收縮の狀態并に出血の有無を檢査すべし又褥婦は此際多く眠を催すものなるを以て妄りに妨ぐべからず若し飲食物を欲する時は薄き茶糜粥「ソップ」及び其他の流動性食物を暖め適宜に之を與ふべし而して助産婦は褥婦及び小兒を悉く處置し終ると雖尚二三時間は褥婦の傍にありて母兒兩體に注意せざるべからず又歸宅せんとする際には更に子宮の狀況出血の有無膀胱の緊滿せざるや否や等を檢し若し膀胱緊滿せる時は仰臥のまゝ股間に便器を挿入して排尿せしむ然れども自然に排尿し能はざる時は嚴重に消毒せるカテーテルを以て之を排泄せしむるを要す初生兒に就ても亦臍帶の斷端を檢し出血なきや或は結紮糸の緩み居らざるや等を精査せざるべからず又呼吸の狀態に注意し母兒兩體に危險なきを確認して後歸宅すべきものとす

第四十一章　雙胎分娩の經過及其取扱法

雙胎分娩に於ては始めより醫士に托するを要す助産婦の取扱法としては正規分娩と異なることなし只一兒娩出後に於て最も精密なる注意を要するのみ

雙胎の分娩は單胎よりも一二週間早く發するを常とす而して其小兒は發育不良の爲め死すること多し母體にありては子宮の過度なる膨大のため屢〻陣痛微弱を起すことあり又第二兒に於て骨盤端位横位等の不良なる位置を取ること多し

分娩の經過は第一兒產出迄は正規のものと同じ次で一兒娩出するも子宮收縮せずして尚一兒を殘し暫時を經て第二兒の胎胞を形成す而して第二兒若し正規位置を取

れる時は其分娩は第一兒よりも容易なるものとす胎盤は第二兒娩出後一個又は二個共に出づるを常とすれども稀には各胎兒に伴ふて別々に產出することあり兩兒分娩の間は通常十五分乃至三十分なるも時としては半日或は一晝夜を要することあり又第一兒娩出後數週若しくは數月間を隔てゝ第二兒を產出することもありと雖頗る稀有の事なり

雙胎分娩の處置

產婦は之を補助せざるべからず即ち第一兒分娩して臍帶を結紮せんとするに至れば最も注意して第二結紮を施さんことを要す若し之を忽にする時は第二兒をして多量の血液を失はしむべし次で第二兒を娩出すべき陣痛發作すれば尙ほ第一兒に於けるが如く之を處置す此際注意して心音を聽取すべし是れ時として胎盤早期剝離のため第二兒を危險ならしむることあればなり又兩兒兩性にして良く似たる時は後に何れの小兒を先きに娩出したるやを見別け難きことあれば助產婦は始めに產出せる小兒に記しをつけ置くべし而して雙胎の小兒は一般に發育不良なるが故に之を溫暖に保たざれば死亡し易し

三胎以上の分娩に於ても雙胎に於けると同樣の處置をなせば可なり

第五編　正規産褥の經過及其取扱法

第四十二章　正規産褥

産褥とは全く分娩の終りたる時より妊娠の爲に變化せる生殖器及び全身の狀態悉く回復するの間にして凡そ六週乃至八週日を要す而して産褥中の婦人を褥婦と云ふ授乳せざる者に於ては産褥の終りに至れば再び月經を來すと雖も授乳せる婦人は分娩後凡そ九箇月を經ざれば來潮せざるものなり斯の如く産褥期に在りては褥婦全身の諸器は漸々常態に復すと雖も乳房のみは更に増大し乳汁を分泌するに至る者なり

第四十三章　生殖器の復故機能

増大せる子宮及び其他の部分が産褥中漸々舊に復する

の機能を稱して復故機能と云ふ

第一　子宮の縮小

子宮の縮小　するは妊娠中に増殖せる筋組織が崩潰して其容積を減少すると後陣痛と稱する子宮の收縮とに基くものなり

後陣痛　とは分娩後に發する弱き子宮の收縮にして恰も分娩時の陣痛に於けるが如く子宮の時々硬くなりて疼痛を伴ふを云ひ時を經るに從ふて次第に微弱となり遂に産後二三日にして消滅し久しきも五日以上に亘ることなし而して後陣痛の强弱は分娩時間の長短に關係する者にして其長きものは弱く短きものは强し故に初産婦は甚だ微弱にして時としては全く感せざるものありと雖も之に反し經産婦は强く往々其安眠を妨ぐるに至ることあり其

他凝血、胎盤片等の子宮内に遺存するときは強劇なるを以て注意せざるべからず（後陣痛の作用に就ては前編分娩の條を參照すべし）又後陣痛は乳房の刺戟により促進せらるる者なるが故に褥婦自ら嬰兒に乳を授くる時は屢〻其發作を來し速かに子宮を縮小せしむるの効ありとす

子宮の狀態　子宮は分娩後直ちに之に觸るれば殆んど手拳大なれども再び增大して十二時間を經れば其底部は臍と恥骨縫際との中央に位すべく異常なければ決して之より上方に達することなし然れども膀胱充滿する時子宮は押し上げられて其底部臍の高さに達することあり之を假性の增大と云ふ直腸の充滿せる時も亦略ぼ同一の狀を呈す若し膀胱直腸共に空虛なるに係はらず此の如き變狀を呈す時は子宮腔内に出血せるものにして甚だ危險の徵候なり而して子宮底は分娩後第二日若くは第三日より漸次に下降し第八乃至第十日に及べば恥骨縫際の後方に入り第十二日に至れば全く小骨盤中に降る又子宮は既に一定の收縮を營みて常體に復するの後ちと雖も未だ一回も妊娠せざる婦人の子宮に比すれば大約一仙迷長きものなり

子宮内面殊に胎盤の剝離面　は分娩後無數の血管斷裂口あれども後陣痛の發作と凝血の生ずるとによりて全く閉塞し止血するに至る者なり

子宮頸管　は分娩直後に於ては尙ほ自由に手指を通過するも四五日を經れば僅かに一指を通すべく第八日の後ち子宮内口は全く閉鎖して一小指だに挿入すること能はず

子宮膣部　分娩直後に於て子宮口緣は二個の弛緩せる片狀をなして膣内に下垂し殆んど子宮膣部を區別し難し

と雖も十日を經過すれば明瞭に之を認め得べし然れども尚其形大にして短かく數個の小裂痕を有し凸凹不平を現はす且つ子宮外口は横裂狀を呈し稍〻開せり是等は分娩の爲めに生じたる變化にして生涯消滅せざるものなり

第二　膣の狀態

膣管は漸次に縮小すと雖も全く復舊せずして分娩前に比すれば頗る廣く其壁も皺襞を失ひ平滑となる膣入口に於ては分娩の際夥多の裂傷を生じ且つ處女膜の附着部も亦斷裂せらるゝが故に治癒の後ち處女膜は結節狀の小隆起をなして遺殘す之をミルチ狀肉阜と云ふ其他の稍〻大なる裂傷は線狀をなせる白色の瘢痕を止むるものなり

第三　惡露の排泄

既に述べたるが如く子宮の内面は後産の剥離せるが爲め普く創面を呈し殊に胎盤の剥離せる部に著るしく此等の創面より一種の分泌物を排泄す之を惡露と云ふ惡露は初め二日間は脱落膜の小片を有せる純粹の血液にして膣粘液を混ずるが故に稍粘稠なり之を血性惡露と云ふ第三日目に至れば其質稀薄となり血液亦減少して淡赤色を呈し恰も水中に血液を混じたるが如く且つ一種甘性の臭氣を帶ぶ之を漿液性惡露と稱し第八日目まで持續す第九日目以後に達すれば更に變じて帶黄白色をなし其質再び粘稠となる之を白色惡露と云ふ惡露は褪色するに從ひ其量も亦共に減じ第三週以後に至れば其減少著るしく凡そ第五週に於て全く盡くるものなり此く惡露の分泌止む時は子宮内面の創傷も全く治癒したるものとす而して授乳者は授乳せざる者より一般に其量少なし

惡露の毒性　惡露は通常子宮腔内にありては毒性を有せずと雖ども一旦腟内に排泄せらるゝ時は此内に存在せる無數の細菌を混じて傳染毒を帶るに至る故に此惡露創面に附着する時は化膿を生ず然れども通常腟内にのみ存在する細菌は概して無害のものなるを以て褥婦の生殖器に存せる多數の創傷に附着するも危險なる疾病を來すことなし今若し助産婦にして不適當なる取扱法を爲し有害なる細菌腟内に浸入して惡露に混じたりとせんか忽ち創面より吸收せられて危險なる産褥熱の症狀を呈するに至る助産婦の責任亦大ならずや

第四十四章　乳汁の分泌

乳房の變化　乳房は妊娠中既に增大し其末期に於て之を壓する時は水樣の薄き乳汁即ち初乳を分泌すと雖も其乳房發育は未だ完全ならず産褥期に至り始めて充分なる發育を成すものなり而して分娩後第二日又は第三日に於て著るしく腫脹し皮膚は緊滿して皮下靜脈を現し感覺頗る過敏となり張り緊るが如くまた刺すが如き疼痛を發し時としては其痛み腋窩肩胛上膊等に及び或は上肢を運動せしめ能はざることあり此際三十八度以内の微熱を發すれども決して之より以上の高熱を現すことなし若し其熱三十八度を超ゆる時は必らず他に異常あるものと認めざる可からず而して此等の狀況は一日乃至二日間持續し乳汁の排泄增進するに至れば漸々腫脹減退し疼痛も亦治するを常とす

乳汁の分泌　は初め少量なりと雖も四五日目に至れば著るしく多量となる蓋し褥婦自ら乳を授け且つ小兒之を哺することを強き時は從て乳汁の分泌し來ること愈〻速に

して其量亦益〻多きものなり之に反し褥婦若し授乳せざる時は暫時の間乳汁自ら流出すと雖も泌乳の刺戟を缺くが故に分泌作用全く止み乳房も亦漸次に縮小するに至るべし又褥婦多量の液體を飲用する時は乳汁の分泌増多するものなり

初乳は既に妊娠末期より其分泌を始め凡そ産褥の第四日迄持續するものにして其性半透明にして粘液狀を帶び黄色の點狀若くは線狀物を混ず之を初乳小體と云ふ而して初乳は稍〻下痢せしむるの作用あるを以て初生兒之を飲ば胎糞を排泄するの効を有す然るを俗人往々空腹の爲め乳汁を求むる初生兒に各種の名稱を附したる下劑を飲用せしむるの舊習を固守す初乳既に此の如き天然の妙能を備ふるに何ぞ不完全なる人工の下劑を用ふるの必要あるべきぞ

常乳は分娩後凡そ第五日の頃より分泌するものにして滋養分に富み帶黄白色を呈し不透明なり又初乳小體を消失して之を認めず乳汁の白色を呈するは其中に乳球を混ずるが爲にして即ち乳球とは脂肪より成る小球なり顯微鏡を以て檢するに非ざれば見ること能はず

乳汁分泌の持續　乳汁の分泌は九乃至十箇月間持續すれば著るしく減少し漸次に止むを常とす故に哺乳期限は小兒の始めて齒を發する頃即ち分娩後凡そ九箇月迄とす然れとも往々哺乳を停止せざるが爲め其刺戟によりて二年若くは三年の久しきを經るも尚は分泌せるものあり此の如き乳汁は頗る稀薄にして滋養分に乏しく之を飲用せしむるも小兒に益なきのみならず却而母兒兩體に害あるものとす

乳汁の變性　乳汁は種〻の事情によりて其質變化を來

す即ち一強き精神の感動ある時或は其量を減じ或は性質不良となることあり二母體の疾病即ち脚氣梅毒等の病毒は乳汁中に移り行くものなり又高き熱を發する時は乳汁の性質頗る不良となる三乳房に疾患ある時は乳汁中に膿を混ずることあり四多くの藥品は能く乳汁中に分泌せらる例之は母體に下劑を與ふれば小兒にも亦下痢し梅毒の藥を與ふれば小兒にも効を呈するが如き是なり五食物中の成分も亦乳汁中に進入し屢〻其性質を變化するものなり

第四十五章　褥婦全身の變化

分娩直後に於ける褥婦

は概ね惡寒を覺ゆるも暫時にして温暖となり發汗を來し大に爽快を感じ以て疲勞の爲め睡眠を催すべし而して十二時間以内に於ては三十八度以下の微熱を發し更に十二時間を經過すれば下降して

平温に復し次で第三日の頃に至り乳房緊滿し乳汁の分泌增進すれば再び三十八度以内の熱を微し一二日にして消退するものなり産褥中に在る婦人の脈搏及び呼吸は健康體に比すれば一般に緩徐なりと雖も頗る亢進し易く少しく臥床を離るゝも忽ち常度を超えて著るしく增多す可し便通は腹壓の減少と身體運動の休止とにより秘結し易く殊に最初の一週間は甚だしき者にて又褥婦を惡露授乳發汗等の爲め多量の水分を排泄するを以て頻りに口渴を覺ゆ而して食欲は初め二三日は減ずと雖も爾後增進し殊に授乳者に於て著るし

産褥中の分泌增進

とは汗尿惡露の分泌を云ふ即ち褥婦の皮膚は常に濕潤し殊に最初八日間は多量に發汗す此の如く産褥中汗の分泌亢進するを褥汗と云ふ尿も亦初め著るしく增量すと雖も腹壓の減ずると尿道の腫脹若く

は彎曲することあるとによりて一二日間は自ら排泄し能はざることあり

第四十六章　褥婦の取扱法

褥婦は他の異常なき婦人に比すれば甚だ速に病に罹り易く若し一旦之に犯さるゝ時は頗る重症となり易し故に褥婦の取扱法に就ては最も注意を要すべく殊に清潔及び消毒法を嚴守せざるべからず而して助産婦が毎常産家を訪問し之を處置するに當ては必らず小兒を先きにし然る後ち褥婦を處置すべし褥婦に就て注意すべき最も緊要なる事項は發熱の有無惡露の性狀子宮の狀態乳房の狀況等にして若し異常ありと認むる時は直ちに醫士を招き其指圖を受くべし決して助産婦自ら處置すべからず今左に詳細なる取扱法を記さん

第一　助産婦の訪問

分娩後八日間は毎日朝夕二回訪問するを規則とすれども母兒共に毫も異常なく經過可良なることを確むる時は時宜により一回となすも可なり爾後第二週の終りまでは必らず毎日一回宛褥婦を訪ひ母兒兩體に注意すべし

第二　體温及び脈搏の檢査

助産婦は檢温器を以て毎訪問時に褥婦の體温を計測すべし異常なくして安靜なる者にありては三十六度五分より三十七度六分の間を昇降し脈搏は五十乃至七十を以て常とす若し體温三十八度を超え暫時を過ぐるも尚ほ下降せざる時は異常あるが爲めなるを以て速かに醫の診察を受くること必要なり

第三　乳房及び腹部の檢査

乳房に就ては能く緊滿し充分乳汁の分泌ありや否や乳頭に損傷を有せざるや又は乳頭能く突隆し小兒の哺乳に適するや否や等にして腹部に於ては子宮底の高さ疼痛の有無及び膨滿の如何幷に膀胱の充滿せざるや等を診すべし若し膀胱著るしく充滿せる時は從て子宮も壓上せられ其底は高部に位するものなり

第四　惡露の檢査

産褥中假令正規の經過を取ると雖も惡露の附着せる壓抵布は一定の容器又は油紙製の袋に入れ財へしめ每訪問時には必らず之を檢査して異常なきや否やを確かめ然る後ち捨つべきものとす又産家により擔任醫士の屢〻來診することあり然る時助産婦は豫め壓抵布に番號を附し置き初めのものより順序よく幷列せしめて醫士の檢査に供すべし

第五　壓抵布の交換

産褥の初めに於ては惡露の排泄多量なるを以て其第一日にありては凡そ二時間每に第二日乃至第三日の頃には三時間每に交換せしめ爾後惡露の排泄減少するに從ひ漸次交換時間を延すべく第七日以後は一日二回となさしむべし若し壓抵布の濕潤甚だしきに係はらず之を交換せざるか又は交換時間遲延する時は褥婦の不快なるのみならず臭氣甚だしく且つ惡露は膣內若しくは空氣中の細菌の爲めに腐敗するに至る然る時は多數の裂傷を有せる生殖器より吸收せられて發熱を來し不慮の災害を生ずること

あり

第六　外陰部の清潔法

外陰部は初め朝夕二回第八日の頃に至れば一回宛ガーゼ又は脱脂綿を一布仙のリゾール溶液に浸して拭ふべし創傷ならば沃度仿謨又は硼酸末を散布するを要す然る後ち外陰部には消毒せるガーゼを置き其上に二枚若しくは三枚の壓抵布を重ね丁字帯を施こすべし此際壓抵布と丁字帯との間に油紙を挿入する時は惡露多量に分泌するも褥婦の衣服其他を汚染することなし壓抵布とは幅三寸縦七寸の大さに切りたる長方形の脱脂綿をガーゼにて被ひたるものなり

膣内の洗滌は正規の經過を取れるものは敢て其必要を見ず却て不完全の洗滌により損傷又は傳染病を誘發す

るの害あり故に助産婦は醫士の命によらざれば之を行ふべからず

第七　褥婦全身の清潔法

褥婦は惡露の排泄あると發汗の多量なると沐浴せざるとにより身體甚だ不潔となり易きを以て殊に其清潔法に注意すべし即ち襯衣は發汗の爲め濕潤し易きか故に屢〻乾燥せるものと交換すべし又一日一回夏季なれば二回微温湯にて手拭を搾り褥婦の身體を足部に至るまで悉く拭ふべし殊に頸部腋窩大腿の内面を丁寧に拭ふを要す其他褥婦の手指は總て一日數回温湯及び石鹸を用ひて洗滌するを良とす

第八　強劇なる後陣痛の處置

後陣痛　強くして頻回發作する時は下腹部に氷嚢法を施べし第三日以後には冷罨法となすべし久しく氷罨法を貼すれば其部凍傷を來すを以て注意せざるべからず此の法によりても尚緩解せざれば速に醫治を求むるを要す但し假令後陣痛強きも發熱を伴はざる時は疾病にあるものにあらず

第九　大小便の排泄

大便　は分娩後第四日より毎日一回づゝ通利あるを良とす若し之れなきときは微温の石鹼溶液をイルリガートルにて灌腸すべし又石鹼溶液中に一食匙の食鹽を加ふる時は通利し易し此の如くにして尚通ぜざれば其處置を醫士に依賴するを要す決して助産婦自ら下劑を投ずべからず若し濫りに之を用ふる時は劇しき痢痛又は強き下痢を

來し其他屢〻下腹内臓器の炎症を誘發するを以て正規の産褥經過を妨ぐることあり

尿の排泄にも亦注意するを要す若し尿閉する時は屢〻危險を來すことあり故に分娩後は一日數回便器を以て排尿を試ましむれば自然に排泄するを得べし分娩後二十四時間を經るも尚ほ尿を排泄せざる時は温暖なる手拭を以て膀胱部を壓法し尚尿の排泄せざる時は助産婦は殴重に消毒せるカテーテルを以て之を排泄せしむべし若しカテーテルの挿入甚だ困難なる時は醫士に依賴すべきものとす又尿閉を來せし際に於て尿通をよくする飲料を與ふる時は尿の分泌盛なるが爲め益〻膀胱に蓄積するを以て此の如きものは與ふべからず而して分娩後第七日間に於ける大小便排泄の際は便器を用ひ決して圃に行かしむべからず

第十　褥婦の衣服及ひ臥床の交換

交換すべき衣服は新調せるもの或は洗濯したるものを用ひ豫め温め且つよく乾燥せしむべし産褥室の温度は常に平等にして始終列氏の十五六度を保たしめ産褥床は直接に風に觸れざる場所に設置するを要す凡て褥婦の衣服又は臥床の交換は大に注意すべきものなるが故に分娩後九日間は助産婦自ら之を交換し其交換はなるべく午前中に於てするを良とす之れ午前中には通常早朝或は夕方に比し褥汗の分泌少量なるを以てなり而して臥床の交換時には室内の温度を尚ほ二度程高くすべし此交換時に當り若し褥汗の分泌多量なれば温めたる綿布を以て身體を拭ひ暫く過ぎ發汗の止むを待ちて後ち交換すべし又豫め二個の産褥床を列べて準備し置き是まで用ひし臥床より他の温め置きたる新床へ移すは最も適當なるものとす若し別に二個の褥床を設くる能はざる場合に於ては臥床を改むるの間適宜の假床を造りて之を温め褥婦を此處に置くべし但し衣服及び臥床の交換に際して助産婦はなるべく褥婦の身體を動搖せしむることなく静かに且つ迅速に行ふを要す其他褥婦をして此際自ら起立し又は歩行するが如きことなき樣最も注意すべし

第十一　産褥室に於ける空氣の交換

産褥室は亦産室と同じく相當の廣さを有し室内の空氣は常に交換して清潔ならしむべし又濕氣を避くるが爲めに濕りたる衣服を室内に掛くべからず且つ煙草其他の煙りを室内に止めぬ樣注意し殊に不快の臭氣を發する便器等は直ちに他へ移すを要す而して晴天の日なれば毎日

數回窓戸を開き少時間開放して室内の空氣を交換すべし此際戸外より入り來る風を直接に褥婦に當てしめざる樣注意すべし時候不順なれば先づ隣室を開放して其室内の空氣を交換し置き次で其室を閉ぢたる後産褥室と隣室との間を開きて此内の空氣を交換すべし又薫香を焼き香水を撒くが如きは唯惡臭を消すのみにして空氣を清潔ならしむるの作用なきものとす其他室内の掃除は濕りたる布片を用ひて拭ひ取り塵埃の飛散せぬ樣防ぐを良とす

第十二　授乳

母の授乳は獨り小兒の健康を保つに大切なるのみならず之れが爲めに褥婦は食氣を增して榮養を進め且つ子宮の收縮を促し惡露の閉止を早からしめ以て産褥の經過を善良にし生殖器の疾病を防ぐ等母體に於て大なる利益あるものなり

授乳時間

褥婦七八時間安眠せるの後ちは直ちに第一回の授乳をなさしむべし俗間に於ては往々一二日間乳房に就かしめざることあり此の如きは甚だ不良にして小兒には衰弱の爲め哺乳力を減じ乳房は刺戟を受けざるを以て分泌增進せざるに至るものなり第一回の授乳終らば爾後時間を一定して之を與ふるを良とす始めより時間を定むれば小兒は能く之に慣るゝものなり時として此習慣の困難なることあれども授乳婦の熱心により多くは數日にして慣るゝに至る此の如き習慣は小兒の發育に最も佳良なる關係を及ぼすものなり之に反し當初を不規則に授乳し一時の愛に溺れて等閑に附すれば終に之を改むるの時期を失ふに至る故に豈は凡そ毎二時間となし夜間は哺乳休止時間を長くして成るべく母兒共に安眠する樣習慣せしあるものなり

むべきを以て凡そ毎四時間となすべし

授乳の方法

乳房は左右屢〻交換して與ふるを良とすれども一回の授乳間には一側に就かしむべし今右方の乳房を授けんとせば褥婦は右側に臥し右の肘を杖きて身體を支へ其前膊を以て小兒を抱き豫め清潔に拭ひ置きたる小兒の口に含ましむべし左側の乳を授けんとする際は左側に臥せしめ右方に於けるが如くなすなり又分娩後九日間は坐して授乳せしむべからず之れ蓋し子宮甚しく壓下せられて其下垂症又は脱出症等を發すべきが故なり小兒に乳の哺乳するには間斷ありて吸ひては休み休みては又吸ふを以て授乳婦は忍耐を以て充分長き時間授乳すべし通常此時間を十五分乃至三十分となす

授乳時乳房の處置

總て授乳する際乳頭及び乳暈の部を微温湯と石鹸を以て清潔に洗滌し後ち微温湯に濕したる布片を以て乳頭を牽き出し小兒の口内に含ましむべし授乳終らば再び同前の法を行ひ清潔にして柔軟なる布片を以て乳房を被ひ温かに保たしめんことを要す乳房を不潔ならしむる時は乳頭の糜爛乳腺炎等を起すのみならず又小兒の口内疾患を發せしむ若し乳頭赤色となりて糜爛を呈せんとするものは授乳後直ちにワゼリン又はグリセリンを塗布し之を豫防すべし

授乳時の注意

小兒哺乳の際乳房を以て其鼻孔を閉ぢ呼吸を障ぐることあれば一指を以て輕く離し之を害せぬ樣注意すべし且つ授乳婦は哺乳せしめつゝ睡眠するが如きことあるべからず否らざれば往々過て最愛の兒を窒息せしむるの危險あり其他哺乳時殊に注意すべきは褥婦自ら手を陰部に觸れざることなり若し此注意を缺き不潔なる手指を以て乳頭に觸るゝ時は病毒を傳へ更に小兒に

も危險を及ぼすことあり故に手指の汚染せる時は百倍のリゾール溶液にて洗滌し然る後ち授乳せしむべし

乳量僅少及び乳房緊滿の處置　乳汁の分泌少なき時は牛乳其他の滋養に富める飲料を多量に與へ且つ屢ゝ哺乳せしめて之を刺戟すべし決して直ちに授乳を廢すべからず又乳量多くして乳房の緊滿甚だしく褥婦疼痛を訴ふる時は少しく食量を減じ且つ殊に飲料を減ぜしめ綿布を以て乳房を提擧し其綿布の兩端は項部に於て結縛すべし褥婦若し授乳することを能はざる際此の如く乳房緊滿する時も亦同樣に處置すべし妄りに搾り出すは却て分泌を增さしむるものとす其他乳房に氷卷法又は冷卷法を行ふ時は其疼痛を減じ且つ多少乳汁の分泌を減少せしむ

授乳の困難なる場合　乳頭の甚だ短かきもの乳頭の凹陷したるもの或は乳房の扁平にして充滿したるもの等は授乳困難なるが故に指を以て時々乳頭を牽き延ばすか或は他の人に吸はしむるか吸乳器にて之を吸ひ出さしむべし若し小兒口を閉ぢて開かざるか或は哺乳運動を營まざる時は其頤を徐々に下方へ牽引して口を開かしめ舌上に乳頭を置き乳汁を搾り出すか又は微溫の砂糖水を點滴し以て哺乳を促すべし

褥婦の授乳を禁ずべき場合　は（一）脚氣及び腎臟病に罹れる時（二）產褥熱其他の熱性病に罹りたる時（三）結核梅毒癲病等を有する時（四）其他の重き疾患及び精神病癲癇慢性の皮膚病等を有する時（五）乳腺炎に犯されたる時又は乳頭に糜爛損傷等ある時（六）身體常に虛弱なるか營養不良にして貧血せる者等なり勿論此の如き場合に於ては醫の診察を求め其可否を決すべし

離乳時の處置　哺乳は適當の時日を經れば漸々廢すべ

し之を離乳と云ふ即ち此時期に至れば小兒の哺乳を減せしめ其不足を他の食物によりて補ひ漸次之に慣らしたる後ち全く哺乳を廢するなり此の如く母乳の不用となれる時は乳房を綿或は清潔なる毛織物を以て輕く繃帶すべし此際乳房緊脹し疼痛ある時はワゼリン若くは其他の緩和なる油を其皮膚に塗布すべし但し膏藥の類は全く用ゆべからず斯くするも乳房尚硬く緊脹せば飲料及び營養分に富める食物を制限し且つ大便の通利を促すべし

第十三　褥婦に指示すべき攝生法

精神の安靜　褥婦は頗る精神過敏なるものなれば過度なる喜怒哀樂は勿論高聲の談話他人の來訪等も成るべく避けしめ殊に分娩後九日間は全く面會を禁ずべし

身體の安靜　褥婦は又頗る身體の安靜を要し生來壯健の人にても産後九日間は靜臥せしむべし褥婦若し此攝生を守らずして早く褥床を離れ又は身體を甚だしく動搖する時は子宮の弛緩、膣及び子宮の下垂若くは脱出等の諸症を來し惡露も亦久しく持續するのみならず時として恐るべき出血を起すことあり故に大小便の排泄時衣服及び臥床の交換時にはなるべく其動搖を避けしむべし産褥の經過可良にして毫も身體に異常を感ぜざる時は褥婦は多く助産婦の言を用ひず強て褥床を離るゝことあるが故に助産婦は早く離褥し若くは身體を動搖するの危險を懇切に説明し嚴重なる安靜を守らしむべし

離褥及び運動　上述の如く毫も異常なきものに於て分娩後九日間は決して離褥せしむべからず虚弱なる婦人に於ては二三週間就褥せしむるを良とす而して正規の産褥なれば二週間後にして始めて室外に逍遥せしめ門外の散

歩は暖かき日と雖も三週間後に於てし冬季なれば四五週間の後ちなさしむべし又離褥は之を徐々に營む樣にするを要す急に離るゝ時は子宮全く回復するの後ちと雖も其下垂症を起すことあり故に假令離褥及び運動を行はしむるも産褥期中は身體を大切に保護し過度の運動即ち重きものを提ぐること荷ふこと階段を登ること大便の際強く努責する等は禁ずるを良とす

温浴　褥婦の全身浴は第三週以後に至りて始めて之を行はしめ坐浴は九日以後に至らざれば營ましむべからず本邦に於ては古來六日だれと稱し分娩後六日目に坐浴を施すの風習は甚だ危險なるを以て之を廢さゞるべからず

交接　産褥期間は嚴重に注意を與へ全く之を廢せしむべし然らざれば往々生殖器の炎症出血突然の發熱等の障害を來し産褥經過を不良ならしめ且つ之を遷延す

食物　褥婦の食物は分娩後三日間は牛乳肉羹汁稀粥半熟卵等の流動性食物を取らしめ又柔軟なる良肉を食するも可なり第四日より漸次固形の食物を取らしめ且つ充分なる營養物を與ふべし第三週間前後に至れば常食に復せしめて可なりと雖も尚消化し難きもの風氣を釀し易きもの或は強き香料等は禁ぜざるべからず

飲料　は麥湯微温湯砂糖湯等を飲ましめ一週間後に至れば薄き珈琲及び茶の如きものは害なし但し其濃厚なるものは禁ずべし又産褥中強き酒類は飲用せしむべからず然れども麥酒の弱きものは乳汁の分泌を增進するの効あるを以て飲用せしむるも可なり

第十四　授乳婦の飲食物其他の要件

助産婦は授乳婦に向ひ懇切に理解すべき樣授乳中に

於て注意すべき事項を敎示すべし就中授乳婦の生活法は平素と大差なきを良とす但し食物中乳汁の質を害すべき品は避くべし即ち酸味及び香ひ高き食物强き香料鹽漬の食物脂肪多き食物身體を温暖ならしむべき飲料等は禁ずべき者とす麵類は授乳婦に適當なる食品なり其他の滋養物及び飲料等は褥婦に於けるものと同じ授乳婦大便秘結する時は適宜の運動を營ましめ煮たる菓物を食し稀薄なる飲料殊に砂糖水を飲めば多くは通利を得べきものなり之に依りて尙ほ通せざれば灌腸を行ふべし又長き間狹き室内にありて運動不足する時は乳汁分泌の量減少するのみならず其性質を惡しくするが故に適度の運動は甚だ必要なるものなり又食物及び夜間休息の不足等も其分泌を減ぜしめ其性を不良ならしむ其他授乳婦に於ける精神の感動等に由りても乳汁の分泌量及び性質に變化を來すものなれば甚だしき精神感動等の後ちには決して直ちに哺乳せしむべからず此の如き場合には先づ吸乳器を以て乳房中に潴溜せる乳汁を吸取し然る後ちに哺乳せしむべし乳房は常に温暖に保ち壓迫を防ぐを要す又授乳期中始めの三箇月間は全く交接を止むべし之れ授乳婦更に妊娠する時は其乳汁は漸々稀薄となり小兒を養育するに不適當となるを以てなり故に若し授乳期中に妊娠する時は其授乳を廢し小兒は乳母に就かしむるか又は人工營養を行ふべし授乳期間に於て月經來潮するも母兒共に害なきものなれども時として小兒は二三日間不安となることあり

第六編　異常妊娠及び其取扱法

第四十七章　消化器に於ける障害

第一　妊娠性惡阻

惡阻とは妊娠性嘔吐を云ひ各人により著るしき輕重の差あるを以て今之を三期に別ちて述べんとす

第一期惡阻　妊婦の過半は妊娠第一箇月の終る頃より嘔心を來し又時々嘔吐を發するものにして殊に早朝空腹時に劇しとす之を第一期惡阻と云ひ妊婦は甚だしき苦悶を呈するに至らずして多くは第三箇月の終り若しくは其以前に於て止むを常とす然れども時として此嘔心嘔吐は漸次增進し以て第二期惡阻に移り行くことあり

第二期惡阻　とは第一期症狀の增劇したるものにして絶えず嘔心を覺え爲めに食慾不進となり且つ嘔吐は頗る甚だしくして遂に算すること能はざるに至る故に殆んど絶食の狀態となり妊婦は其他頭痛不眠煩渴或は胃痛等に苦しみ口唇は乾燥して皸裂を生じ齒龈は煤色を呈して時々出血し舌の白苔著るしく頰部潮紅し脈搏頻數便秘尿通不利となり遂に熱候を現はす此時期に於て適當なる治療を施さゞれば危險なる第三期惡阻の症狀を發するに至るべし

第三期惡阻　に於ては第二期症狀に加ふるに腦症を來したるものにして即ち頭痛劇しく眩暈耳鳴を發し凡ての音響はるかに聽え遂には精神朦朧となり絶えず眠れるが如き狀を呈し呼べども答へず叫べども應せざるに至る或は全く不眠症を來して終日譫語を發し恰も發狂せるかの如きものあり此の如き第三期の惡阻を發する時は治癒

覺束なくたとへ適當の治療を施すと雖も遂に之を救ふ能はざること屢々とす

原因　に種々あり主なるものは

一子宮の位置變狀即ち後屈前屈等

二子宮壁又は頸管の硬くして卵の發育に伴ひて延長し難きもの即ち子宮壁の腫瘍或は高年の初妊婦

三子宮の疾病即ち實質炎或は內膜炎子宮の癒着等

四卵巢或は喇叭管の疾病

五平素より胃或は腸の疾患を有するもの

六雙胎羊膜水腫等

七貧血性の婦人

八腎臟病心臟病等を有するもの

九ヒステリ性の婦人等とす

處置　凡て助產婦は妊婦に惡阻を來すべき原因なきや否やに注意し若し之を起さんとするの疑ひあるもの或は前回の妊娠時に劇しき惡阻を發したるもの等にありては たとへ輕症なりと雖も速に產科醫に治療を乞はざるべからず惡阻の第一期にして食慾營養共に佳良なるものは自然に治することあり此の如き際に於ても助產婦は尙ほ輕しく觀過することなく第二期症狀に移らざる樣注意すべし即ち消化し易き食物を與へ其好まざるものは避け新鮮なる空氣中に於て適當の運動を營ましめ大小便の通利を能くし便秘あらば緩和なる灌腸を施し且つ屢々溫浴せしめ全身の新陳代謝を盛ならしむべし旣に第二期症狀を發せるものは醫師に托するの外安靜に臥せしむべく劇しき嘔吐の際胃部に氷囊を貼すれば時として沈靜することあり其他氷囊は胃痛をも稍々輕快せしむるの効あり煩渴劇しければ牛乳中に氷片を混じて寒冷となしたる者を少

量宛與ふべし又口唇乾燥するを以て屢々綿を冷水に浸し之を以て口唇を濕はしめ其皸裂することを防ぐを良とす此時期に於ける便通は殊に注意し勿論醫士の命令に從ふべきもなるべくは日々緩和なる灌腸を行ふべし屢々入浴して新陳代謝を盛ならしむることは甚だ効ありと雖も第二期の劇しきものにありては身體を動搖し難きを以て助産婦は稍々大なる西洋手拭を微温湯にて絞り一日二回程妊婦の全身を拭ふを佳とす第三期症狀に陷れる者にありては醫士が流産術を行ひ其他適當なる治療を施すに係はらず母兒共に危險に陷るもの多し助産婦は此際尚ほ第二期に於けるが如く處置すべきものとす其療法に種々あり雖も何れも卓効を奏すること尠なし予が近來創意せし處のベラスツング療法は頗る奇効を奏し第三期に於けるものと雖も流産術を行はずして尚ほ能く之を治癒せしむ

第一期及び第二期の如きは此療法に依り殆んど治せざるものなし且つ熟練して巧みに之を行へば有効無害なるを以て第一期症の際之を施せば第二第三期の如き危險症を防ぎ得可しされど此療法は熟練せる醫士の診斷と其醫士自ら之れを行ふか或は其嚮士監督の下に熟練せる助産婦が施すにあらざれば不慮の災害を來すことあり

第二　便秘

妊娠中は屢々大便秘結し易く其頑固なるものにありては七日若くは十日の間便通なきことあり此の如き時は腸内に瓦斯を生じて腸管膨脹し妊婦は腹滿に苦しみ食慾減じ逆上頭痛不眠等を起すに至る或は又血液骨盤内に鬱積し痔結節を生じて永く婦人を苦ましむ

處置　妊婦攝生法の條下に述べたる諸種の方法を施し

又常に便秘の傾向あるものは脂肪多き食物引割麥又は菓物を與へ或は小豆を良く煮て砂糖と鹽とを適宜に加へ食せしむも可なり其他頑固のものには醫治を乞ふべし

第三　下痢

多くの妊婦は便秘するものなれども時としては毎妊娠時下痢の習癖あるものあり此の如きものは注意せざれば往々甚だ久しく持續し妊婦をして衰弱せしめ或は遂に流産を招くことあり其他感冒に罹り又は飲食物の不適當なる等によりて下痢を來すことあり

處置　腹部に温卷法を施すか或はフラネルの腹帶を以て之を温包し運動を戒め葛湯粥麪牛熱卵パンを燒き之に熱き牛乳をかけたるもの等を與ふべし牛乳は善き滋養物なりと雖も之を飲用する時は間々下痢を來す人あるにより注意せざるべからず又飲食物は凡て温暖なるものを用ふるを佳とす若し二三日を經るも下痢尚止まざるか或は初めより劇しき下痢ある時は速に醫治を乞ふべし

第四十八章　子宮增大に因する障害

第一　利尿の異常

一尿意頻數　增大せる妊娠子宮のため膀胱は壓せられて妊婦は頻りに尿意を催すを常とすれども其症狀甚だ增劇し一日數十回に及び或は尿道壓迫せられて尿通の際疼痛を來せる時に於ては左の處置を施さざるべからず

處置　なるべく身體を安靜にし下腹部に温パップを行ひ坐浴を施して膀胱部を温め温かなる牛乳葛湯等を與ふべし若し此等の法により治せざる時或は尿通の際痛みを

覺ゆるものは醫治を要す

二尿閉　子宮若し甚だしく尿道を壓する時は全く尿通すること能はざるに至る之を尿閉と云ふ妊婦若し此症に罹る時は膀胱甚だしく充盈するが爲め下腹部膨滿して劇しき緊滿痛を感じ食慾不進嘔心嘔吐等を來し時としては腦症を發するに至る又尿閉を來せる際適當の療法を施さざれば遂に膀胱破裂し生命を失ふことあり

處置　速かに醫士を聘し若し其來診遲きか又は危險に迫る時は嚴重に殺菌せるカテーテルを以て排尿せしむべし

三尿失禁　とは不隨意に尿の排泄するを云ひ甚だ不癒快なる症にして膀胱充滿せるの際或は笑ひ嚏みし咳する等の際知らず〳〵尿の漏るゝものなり

處置　尿失禁ある時は頗る陰部を不潔ならしむるを以て微温湯にて毎日數回洗滌せしむべし妊婦耐え得べくは冷水を以てするを良とす劇しきものは醫治を求むべし

第二　浮腫

妊娠の後半期に至れば增大せる子宮のため骨盤內の靜脈壓迫せられ下肢に循れる血液は自由に心臟に歸ること能はざるを以て血液鬱滯し血中の水分は血管壁より漏れて組織內に蓄積し以て浮腫を來す此の如き下肢の浮腫は妊婦の過半に來るものなり其他子宮の增大に因らずして起る浮腫あり左の如し

一　腎臟炎の浮腫は全身に現はれ先づ顏面より之を來す

二　心臟病の浮腫は主に下肢殊に足背に現はる

三　脚氣の浮腫も亦主として下肢に現はるゝも麻痺を